

164
121

小林光茂編

真理の叢

駒込會藏版

特 18
530

川 林 光 茂 編

真 理 の 叢

駙 茨 敦 會 藏 版

發刊の趣旨

明治二十六年の十月、我駒込教會は専ら駒込の人士に神の仁惠を知らしめ主の救ひに與らしめんとし市内諸名士の來演を請ひて連夜基督教演說會を開けり、然るに幸にして毎夜とも多くの聽衆を得たるは誠に神恩の然らしむる所なりと感謝せずんばあるべからず。然れども我等の希望する處、如何ぞ之れを以て憾なきと言ふを得んや、仍て更に同演說を印刷に附して當時來聽し能はざりし人々に之れを頒ち一層の満足あらむを慮り、先づ演說原稿の寄贈を各辯士に請ひける



に、皆喜び此舉を賛成せらるゝ所となり、また出版印刷費の如きは信徒有志の者及び婦人會より寄附することとなり、茲に我等の計畫を成就せり。乃ち牧師小林光茂氏は専ら編輯の勞を取り、教會役員の人々は自餘の事に力を致して遂に此の書の成效を見るの運に至れり。先之二三教會の役者皆な勸めて曰ひけらく、該演説集は啻に駒込人士のみに頒つものに止めず、相當の代價を以て何人にも之れを購はしむるに至らば亦た裨益する所更に大なるべしと、之れ素より我等の希ふ所なれば再び寄稿諸先生の賢諾を得て今や冊子の部數

を増刷し、扱ては一般に之れを須ち世人の愛讀を促すこととはなりぬ。讀者もし思ひを直くして、この叢に逍遙せば、大ひに基督教の眞理を覺とる處あるべきを信ず。これを本書發刊の趣旨となす。

明治二十七年一月

駒込教會執事

伊藤爲吉記

例言

一本書は去る明治廿六年十月中駒込教會に開きたる演說會に於て十人の辯士諸君が演說せられたるもの、原稿を申受けて刊行せる所なり其中横井時雄氏の「宗教の中心點」は演說會の當時出席せられし辯士の一人村井知至氏病痾の爲め其「信仰論」の原稿を申受くること能はざりしかば之に代へて申受たるものなり

二編者が其當時演說せる基督教一班は長文に失するの虞ありしがため別に一本として刊行し只其中より基督教の起原のみを抄出して掲載せり

三本書を印刷するに際し専ら校正の勞を取られ且つイビー、コーツ兩氏の演說の英文原稿を譯出するに方り編者に助力を與へられたるは梅澤良朔氏なり茲に記して謝意を表す

明治廿七年二月

編者誌

真理の叢目次

| | | |
|-----------|-------|------|
| 神 | 原田 助 | 一 |
| 宗教の中心點 | 横井時雄 | 十五 |
| 基督教の仁愛 | 原野彦太郎 | 二十三 |
| 實在的並理想的人生 | 小澤孫太郎 | 三十五 |
| 希望 | 丹羽清次郎 | 四十七 |
| 聖書 | コ ー ツ | 五十五 |
| 基督教の起原 | 小林光茂 | 八十一 |
| 耶穌基督 | 本多庸一 | 百十五 |
| 聖靈—勢力の本源 | イ ビ | 百三十七 |
| 安心 | 外山孝平 | 百四十七 |

真理の叢

神

番町教會牧師

原田 助



神と云ふものは六ヶ敷く又た吾人に縁の遠き問題はなし神は有り
 や無しと神は如何なる者なりやと尋るに漠然として捕ふる所なき様
 に見ゆ素より金石や土木にて彫刻したる偶像は手に觸れ眼に見ゆる
 ものをれば其有無や其性質に就て彼是論する迄も無けれども手が茲
 に云ふ神とは宇宙の大本なる無形の靈なる神を指して云ふなり偶像
 の信するに足らざることは予が茲に喋々するの必要もなかるべしと
 傳束縛も宇宙の間に無形なる獨りの神の存在あるや否やに就ては古
 來絶へず八釜敷き議論のあるとにて哲學上神學上の最大問題なりと

神

一

云ふべき假令神は在りと定めりとするも其神は如何なる神なりや是亦容易ならざる問題にして、同じ基督教徒の中にさへ神に就ての思想は決して一定し居らざるなり左れば吾人は到底此問題は解釋得られざることをして棄て置くべきや、或人は答へて然りと云はん、然れども以上は只だ此問題の一面より見たる説にして、他の一面より之を見れば神といふことは吾人に近接したる問題はなく又た此問題はと大切なるものは稀れなり、此問題を困難なりと云ふは學問上より論ずるが故なり、若しも學問上より見る時は吾人が今日最も明白なりと思ふことも決して容易ならず例へば時間と云ひ空間と云ひ人と云ひ精神といひ愛と云ふか如し誰か時間を知らざるものあらん何人も其存在と必要とを疑はざるなり誰か空間を疑ふものあらん何人も其中に住み其中に働くにあらずや、然れども此時と空との二問題はと

哲學者の紛々たる議論を引起したるものは稀れなり、其有るや無しや其實体は如何なるものなるや未だ學理の一定したることを聞かず人と云ひ精神と云ひ愛といふが如きも亦た然り是れ何人も常に口にする所、然れども學問上より之を論ずれば其容易なる問題ならざるはまた時間空間等の問題にも譲らざるべし、

人或は曰はん時間空間の如きは實際上何人も有りて承知せざるを得ざることなり、人の精神と云ふも亦同じ是れ世界一般に多數の人の信する所なり、神のことに於ては決して是の如く一般に信せられたることにあらずと、然りと雖も神と云ふ思想は人類一般に普及したるものにして洋の東西と國の文野と人種の黑白を問はず何れの所にも見ざることもなきは今や何人も承知する所なり、其普く行はるゝ點より云へば時間や空間の思想よりも優れりと云はざるべからず、文字もなく禮

儀もなき野蠻人の間に於ても禮拜すべきものあらざるは無し、神の議論は多くは言語上の議論なり、或は神と云ひ天帝と云ひ造物主と云ひ若しくは佛と云ふも其實は人間以上に力を有する靈体を指さるはなし、將た又た無神論を主張する人と雖も多くは言葉の上に就て彼是れ相合はざるものにして、何者をか信せざるべからず何者にか依らざるべからず人間は決して己が心のまに／＼此世に生存する者にはあらずとは最多數の男女の信する所なり、木像金佛の前に跪く者と雖も衆心神を求むるの念に外ならざれば決して笑ふべきものにあらざるなり、只だ此神は如何なるものなりと云ふに至て人々の間に議論の相分るゝことと知るべし、

神といふ思想は世界一般に普きのみならず亦最も人心に必要なり、人は神なくして心を安んずること能はず、人生に満足すること能はず、其

之を求むるの切なるより云へば殆んど肉体に食物を慕ふが如しと云ふも可なり、イエスの所謂人はパンのみにて生るものにあらずとは之を云ふなり、或は時として信仰を輕蔑し一種の宗教を擯斥することありども、眞面目に立還りたる時はまた宗教の我心に欠くべからざるを感ずること渴して水を求め、餓へて食を慕ふが如し、然れば則ち神を信することは吾人に縁遠き問題にあらずして尤も近接なる問題にあらずや吾人は之を困難なる問題として棄て置くこと能はざるなり、

左ればキリストが神のことを説き玉ふを見るに少しも神の存在や神の性質を証據し又は之に就て議論せられたることなし、キリストは人が神を信すは當然のこととして彼等を教へたり、是故に基督教は人の未だ曾て求めたることなき一種の神を紹介して世人を信せしめんとするにあらず、其實は凡ての人の皆心に慕ひ求むる所のものを與へん

とするのみ、若しも神といふ思想なく又た之を求むるの信仰もなき人に向つて基督の教を説き神を信せしめんとするも恐らくは徒勞に屬せざるを得ざるべし、何となれば是れ詩情なき者に向つて杜甫李白の神韻を稱し若くは英語を知らざる者の爲めにセーキスピア、ミルトンの妙味を語るが如くなればなり、聖書に愚かなる者は神なしと云ふと云へり、多き人の間には不具白痴のあるが如く心靈界にも亦此の如き者少きにわらず、今又敬畏の念も信仰も仁愛も眞實もなき者即ち心に神なしと諦めて之に満足する者あらば、之に向つて神を説くは所謂豕に眞珠を與ふるの類なり、然れども是れ決して人の常情にあらざるなり、使徒パウロ曰く我は己を衆の人の良心に質すなりと然り良心あらん者にして始て神の事を解するを得べきなり、斯の如く述べ來れば或は疑ふ者ありて云はん若し君の謂へるが如く

何人の心にも神を信せざるはなしと云はゞ何を以て殊に基督の教を聞くの必要あらんや、佛敎も基督敎も皆同一ならざるを得んやと、否な決して然らずんば神を信すれども未だ神を知れる者なし、少しく之を知れる者なきにあらざるも亦甚だ不完全たるを免れず、人は皆神を求めて而して之を得ざる者滔々皆然り、往時のアデンスの人の如し、彼等は神を信せり祭壇を築きて之に祈れり、然れども記して讀ざる神に献すど云へり、諸君若し自ら満足せりと云はゞ予はまた云ふべき所を知らず、然れども若し信すべきものと頼るべきものを心に求めば乞ふキリストに來りて其教ふる所を聞けよ、彼云く人もし我を遣し、者の旨に従はゞ此敎の神より出るか又己に由て言ふなるかを知るべしと、其意に云く眞實に神を求むる者あらばキリストの敎の眞理を了解すること難からずと、

予は茲にキリストの神に關する教訓の詳細を説く暇なし、惟だ其の最も肝要なる一二點を擧ぐれば、(第二)キリストの所謂神は天地の主宰なる獨りの神なり、是れキリスト以前舊約時代よりして猶太人の信じてたる所なりと雖も、キリストは此の唯一の靈なる神は猶太人のみの神に非ず、凡そ靈と眞理を有する万民の神なることを教へたり、曰く「神は靈なれば拜する者も亦靈と眞理を以て彼を拜すべし」と斯く一方に於ては神は土偶木像の類にあらすして靈なることを教へ一方に於ては神は一國一地方の神にあらすして天下万民の父なることを説けり、今や學術の進歩と共に宇宙を一貫せる法則の万物に存するとす、明かになりたれば多神教が今日の世界に永存する能はざるは言ふ迄もなく、世の進み各國の交通いよ／＼開け行くに従ひ四海の民皆な同情の人類たることを知るに至れり、是に於てか人皆な一神教の道理に

八

九

適へるを思はざるはなし、況んや又た近世の哲學は殆んど皆宇宙の大本たる神の存在を認むるの必要を許さざるはなきに於てをや、(第二)キリストは神の義を説けり、試みに福音書中に傳へられたる山上の垂訓に就て之を見よ、曰く「餓渴くごとく義を慕ふ者は福なり、其人は飽くことを得べければなり、心の清き者は福なり、其人は神を見ることを得べければなり、義ことの爲に責めらるる者は福なり、天國は即ち其人の者なればなり」と然れば凡そ神に事へんと欲する者に向つて要求したる所も亦之に同じ、曰く「人々の前に爾曹の光を輝かせ然れば人々なんぢらの善行を見て天に在す爾曹の父を榮むべし」是故に天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完くすべしと、キリストの所謂天の父の教を聞いて誰か其心に正義の感起さざるを得んや、誰か清潔善良の思想に満ちざるを得んや、

九

九

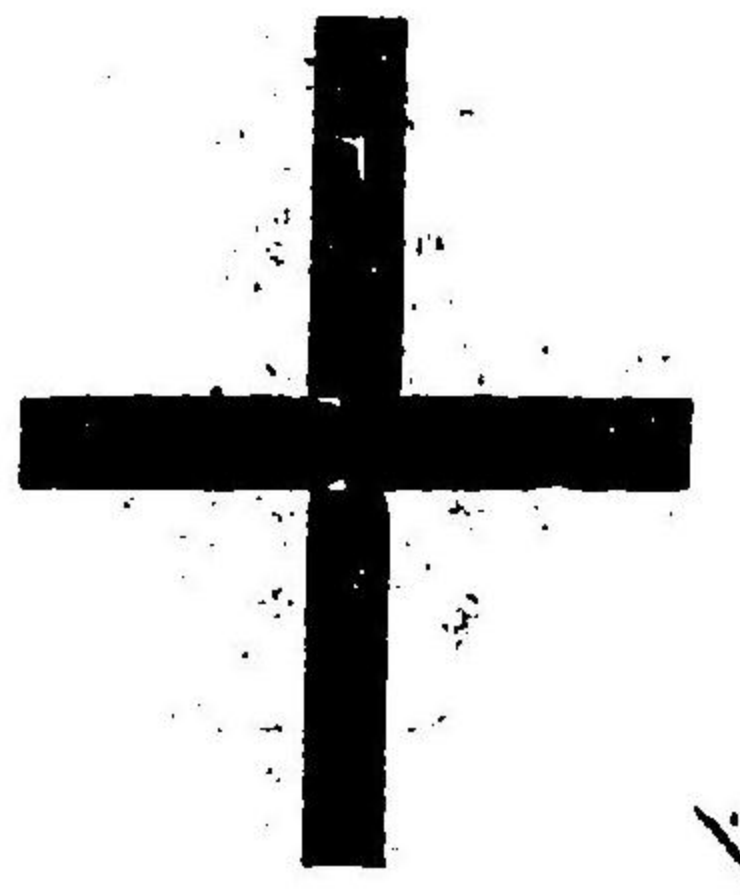
第三然れどもキリストの神は専制なる國主の如くならずして慈愛なる嚴父の如し彼は愛の神なり神は罪を惡めり然れども罪人の翻然悔みて歸るや彼は何人をも之を棄てざるなり抑も愛の道は基督教の特質にして神を愛と説きたるものはキリストより始まる曰くなんぢ心を盡し精神を盡し力を盡し主なる爾の神を愛すべし是れ誠の首なり第二も亦これに同じ己の如く爾の隣を愛すべし斯より大なる誠なしと而して基督は實に躬ら神を愛し人を愛したるものゝ生ける模範にして最も能く其一生の行爲に於て愛なる神を顯現したる者と云はざるべからず使徒ヨハネの語に曰く愛する者よ我儕互に相愛すべし愛は神より出ればなり凡そ愛ある者は神に由て生れ且つ神を識れるなり愛なき者は神を識らず神は即ち愛なればなりと嗟吁誰かキリストの父の聲を聞いて欣然として我主よ我神よと呼び罪を悔みて其愛に

還らざることを得んや
之を要するに神の一なることは學術上の必要に合し其義は倫理道德の基礎を與へ其愛は人類宗教上の要求を満足するを得べし凡そ此世ありてより以來尤も高尚にして尤も人を満足せしむべきの神を紹介したる者は即ちキリストにして吾人がキリストを信するは他なしキリストの教を聞いて其所謂神は最も我心に適するものなるを知りたればなり聞く支那人某基督教を信するの理由を述べて是れ必らず我造物主の教ならざるを得ず何となれば最も能く我心に符合すればなりと云へりとぞ淺薄なるが如しと雖も眞理即ち其中に存せり大學者と雖も誰れか亦之より確實なる信仰の理由を呈することを得んや吾人は切に諸君に薦むキリストの神を學び此神は我神なりや否やを究めよキリスト自ら云ふ父の外に子を識る者なく子(キリスト)及び子の

願はす者(キリスト信徒)の外に父(神)を識る者なしと、吾人が衆心求めて
已まざりし天の父即ち眞の神を紹介したる者は實にキリストにして、
彼は其教訓を性行によりて正義仁愛の神の子たるを見はせり、吾人も
亦キリストを信じ其心を心となすことに依て皆な神の子となること
を得べきなり、

終りに一言す、基督を信するに至る者豈に一樣ならん、又た基督信徒中
には哲學者もあり神學者もあらん、有神論に就て多くの議論を有する
者決して少からざるなり、加之學問上より有神論を研究することは甚
だ必要なりと謂はざるべからず、然りと雖も神を信するは學問の研究
に依らざるべからずと云ひ又は哲學者にあらざれば神を信する能は
ずと思ふは非なり、大に非なり、神は我儕各を離る遠からざるなり、神を
信するの理由は之を我が心に求めざるべからず、吾人が神を信するは

信せざるを得ざればなり、已むを得ざればなり、嗚呼、豈に他あらんや、





宗教の中心點

横井時雄

宗教の問題は二個の要素より成立ちます、一は自己一は外界是れ即ち二つの要素で御座ります、而して己れの意味と外界の成行きとは屢々相協はすして衝突することが御座ります、此衝突が即ち宗教問題の起る始めで御座ります、幼き小兒も其母親の情けある命令に服することを好まず成人して後も是非曲直に關らず自家の意見を言張つて眞理に服するを好まず、渺たる蒼海の一票に異ならざる身を以て此廣大無邊なる天地の威光に敵せんと致します、故に失敗するのは當前の事で御座ります、が失敗すれば即ち自らを答めず自らの無智を怨みずして反つて天を怨み人を答めます、天を怨み人を答むるとは各人の勝手なりといふべきかなれども氣の毒なることはそれが爲めにその心

の中には苦惱と失望、憂愁と不平とが充滿して其人は恰かも地獄に落ちて青鬼赤鬼に責めらるゝの苦惱を致します。是れ實に氣の毒なる事で御座ります。キリストの言葉に「平和を行ふものは幸なり神の子と稱へらるべければなり」と申して御座ります。が實に人と和らぎ天と和らぎ以て心に平和を持つこと程幸福は御座りません。人の幸福といふは即ち平和の別名であります。去れば如何にすれば吾々が心に天に對して怨みなく人に對して尤めなく各々今日々々の職分を盡してまた過去將來を思ひ煩はざる天眞の心を養ふことが出来ましやうか。是れ吾々の心に宗教問題の止む能はざる所以で御座ります。

此天地間には人の小さき考を以て左右す能はざる所の大なる理法の支配があります。此理法は限りなき愛心を以て萬物の間に活動して居ります。而して天地萬有併に人間の社會を率ひて完美十全の域にまで

進達せしめんとしつゝあります。是れ即ち神の働といふもので御座ります。之を信すること神の愛を信するといふ事で御座ります。是故に人若し此神と神の働きを信じて己れの身を擧げて之れに一任し己れの考に籠城せず己れの利益の爲めに生きずして天地の大なる考に服し天地の大目的の爲めに生きるといふの心になりますれば其人は即ち限りなき生命を持つものであります。其心には不平なく怨恨なく又た失望の風雲なくして何時も平和幸福の晴れやかなる天氣を眺めて居ります。此心は即ち愛といふものであります。聖書に「愛に居るものは即ち神に居るなり、神は即ち愛なればなり」とあるは即ち此意味で御座ります。

却説此道理は誠に親易きもので御座りまして何人も容易に之を理解することが出来ましやう。唯だ大なる困難といふは一には之を行ふこ

どの六ヶ敷こと、二には之を見忘れ易きことで御座ります、古今萬國の賢人君子にして此道の大意を味ひたるものは澤山に御座ります、併之を平日に實踐し得たるものは誠に少く御座ります、多くは時々の之を味ひ而して多くは之を忘れたるもので御座ります、偶々之を平日に實踐し得たるもの御座りましても、此の道を掲げ持つて恰かも満月の中天に懸つて暗夜を照す如く此道を身に行ふて以て世の光となり得るものは實に一人の主イエス、キリストのみであります

キリストは即ち人間の宗教上思想の中心で御座ります、世の名譽利達に狂奔して深く俗流の水を飲み遂に人品の墮落を極めたる處の人も若しキリストの生涯を思ひ其照臨する道の光に入らば豈ど再び生き反へりて人間の理想に立戻るの心を起しますまいか、又は深く哲學の深林に踏み入り奇花異草を探り索めて遂に行路を踏み迷ひ夜更け身

儘れてまた一歩も進む能はざるに際し忽ちキリストの明月皎々として中天に懸るを見るときには何んど豁然として生涯の理想果して此にありといふの念を發して遂に永遠の生命に立ち返らないであります、しやうか、吾々は兎角に色々の横道に迷はんとし易きもので御座ります、是故に常にキリストなる宗教の理想を掲げ以つて毎事に正しき方向を思ひ起すこと甚だ大切に御座ります

キリストは宗教上の生命で御座ります、讚美歌にも我教主を思ひみればといふが如くキリスト信者たるものはキリストを己の理想となし、最も親き教師となして常に思ひみます、聖書にもまた四つのキリストの傳記を載せて御座りましてキリストの生涯といふものはキリスト教徒に取つて如何に大切なものであるかといふことが示して御座ります、即ち前讀み上げましたる聖書の言に爾曹イエスを見ざればも之

を愛し今見ずと雖も信じて喜ぶ、其の喜びは言ひ難く且つ榮光あり
 と御座ります通り初代のキリスト教會はキリストとキリストの心を
 愛するの精神に依つて成立つて居りました却説此の如くしてキリス
 トを思ひ其心を愛する時にはそこに一の不思議なる結果が生じて參
 ります、それは吾々の心が何時の間にか自からキリストの心に化して
 來るので御座ります、是れ即ちパウロが吾等鏡に照すが如く主の榮を
 見榮光に榮光いや増りてそのおなじ像に化るなりと申したる譯合で
 御座ります、譬へば此處に一人の赤兒が生るゝが如く吾々の寂寞き心
 の中にキリストが生れ出づるので御座ります、又は吾等の古き精神は
 去つて新しきキリスト的精神を持つに至る之を稱して新しき人とも
 申して御座ります、或はまたキリストの中に隱遁して此世の塵埃を
 遁るゝとも申して御座ります、或はまたキリストと與に道を行くとも申

して御座ります、趣意に於てはキリストの道も佛の道も孔子の道も互
 に相反するものでは御座りません、乍併その實修の方法に至つてキリ
 ストの道は實に梯子を掛けて天に登るが如き便利が御座ります、キリ
 スト教でなければならぬ理由の一は即ち此點で御座ります
 夫故に吾々は心を廣くし思を大にして天地萬有を見、眞理はその何の
 邊より來るも之を受け容るゝの覺悟がなからねばなりません、何の宗
 教にも眞理は御座ります、哲學或は科學の如き又智識を明かにするに
 缺く可らざるもので御座ります、乍併實際に於て宗教の問題を吾々の
 心に解釋せんとするには常にイエス、キリストを以て中心點とせねば
 なりません、何せなれば公明なる見識を以てキリストを信じ、且つキリ
 ストと俱に居るは即ち神と和らぎ人と和らぎ己の本心と和らぎ、以て
 天地の眞人物となり、以て永遠限りなきの道を持つことであるからで

を愛し今見すと雖も信じて喜ぶ、其の喜びは言ひ難く且つ榮光あり
 と御座ります通り初代のキリスト教會はキリストとキリストの心を
 愛するの精神に依つて成立つて居りました却説此の如くしてキリス
 トを思ひ其心を愛する時にはそこに一の不思議なる結果が生じて參
 ります、それは吾々の心が何時の間にか自からキリストの心に化して
 來るので御座ります、是れ即ちパウロが吾等鏡に照すが如く主の榮を
 見榮光に榮光いや増りてそのおなじ像に化るなりと申したる譯合で
 御座ります譬へば此處に一人の赤兒が生るゝが如く吾々の寂寞さ心
 の中にキリストが生れ出づるので御座ります、又は吾等の古き精神は
 去つて新しきキリスト的精神を持つに至る之を稱して新しき人と
 も申して御座ります、或はまたキリストの中に隠遁して此世の塵埃を
 遁るゝも申して御座ります、或はまたキリストと與に道を行くとも申

して御座ります、趣意に於てはキリストの道も佛の道も孔子の道も互
 に相反するものでは御座りません、乍併その實修の方法に至つてキリ
 ストの道は實に梯子を掛けて天に登るが如き便利が御座ります、キリ
 スト教でなければならぬ理由の一は即ち此點で御座ります
 夫故に吾々は心を廣くし思を大にして天地萬有を見、眞理はその何の
 邊より來るも之を受け容るゝの覺悟がなからねばなりません、何の宗
 教にも眞理は御座ります、哲學或は科學の如き又智識を明かにするに
 缺く可らざるもので御座ります、乍併實際に於て宗教の問題を吾々の
 心に解釋せんとするには常にイエス、キリストを以て中心點とせねば
 なりません、何せなれば公明なる見識を以てキリストを信じ、且つキリ
 ストと俱に居るは即ち神と和らぎ人と和らぎ己の本心と和らぎ、以て
 天地の眞人物となり、以て永遠限りなきの道を持つことであるからで

御座ります、どうぞ願くは殿誰も如何なる場合に於てもキリストを忘
れず常にキリストと與に樂みに入りて此世の生涯をお渡りあらんこ
とを願ひます



基督教の仁愛

牛込教會牧師

原野彦太郎

仁愛なるものは天下の達道萬古不易のものなり、豈基督教の仁愛、佛教
の仁愛、儒教の仁愛なるものあらんや、然れども一富嶽之を望むの處に
隨て多少其趣を異にす如此一仁愛の大道之を見るの人に從て多少其
義を異にせざるを得ず是に於てか基督教の仁愛、佛教の仁愛、儒教の仁
愛なるものあり而して余の茲に論せんと欲する處のものは基督教の
仁愛なり、其諸教との比較の如きは本論の主意にあらざるを以て暫く
之を措き、直に進んで基督教の仁愛の何たるを論じ、其他教との優劣如
何の如きは一に讀者の判断に任せんとす而して余は本主意を論ずる
に當り便宜のため三段に分たんとす第一基督教の愛とは何ぞ以下略
して愛の一字を用ゆ第二基督教の愛の本源第三基督教の愛の價値是

れなり

第一 基督教の愛とは何ぞ

基督教の愛を論ずるに當り先づ其愛の何たるを説明せざるを得ざる所以のものは何ぞや他なし基督教に所謂愛なるものは世普通に稱する處の愛なるものと大に其趣を異にするところあればなり乞ふ試に少く之を説かん基督教の所謂愛なるものは(一)通俗用ゆる處の可愛がるの謂にあらす可愛がるとは例へば二三才なる小兒を愛するか七八才なる小女を愛するか其小なるどころ美なる處に於て愛すべきの點ありて存すればなり故に一旦事變生じて其容色衰へ其愛すべきの點を失ふや其愛は忽ち消滅し去るなり基督教の愛は如此外形の變化に由て變動するものにあらざるなり又(二)男女の愛所謂戀なるものにあらず今日に於ては愛なる文字は殆んど一種劣等の意味を以て用ゐら

る或人聖書を讀んでマリア(當時の淑徳ある婦人なり)はイエスの愛する所のものなりといふに至て奇異なる思ひをなしたりといへるが如き以て俗間普通の思想のいかに卑汚なるかを察するを得べし基督教の愛は如此肉慾的なるものにあらず又(ハ)報酬的のものにあらず隣人に對するに好意を以てす故に我亦好意を以て之に報ゆ彼我安否を問ふ故に我また彼の安否を問ふ之れ當然のことなり之れ報酬的にして相當の物品を以て相當の價に易ふる商賣主義に異ならず基督教の愛はかくの如く消極的のものにあらず又(ニ)彼の所謂骨肉の愛にもあらず親子相愛し兄弟相親む是れ人性自然の情なり此の如き愛は惡人すら尙之あり之あること何ぞ特に稱するに足らん基督教の愛は如此自然的のものにあらず然らば則ち基督教の愛は天賦自然の人性に矛盾するものなるか天下万人の義理人情に撞突する不合理的のものな

るか曰く否否否大に否基督教の愛は却て眞の義理人情に合し且つ之を全ふするものなり即ち骨肉の親を厚ふし隣朋の愛を眞にし男女の愛を潔め美の觀念を發達せしめ以て天賦の性を完全にするものなり換言すれば基督教の愛は以上列記の愛を純潔にし且つ之に超越する處の美德を興ふるものなり其美德とは何ぞや他なし我より進んで貴賤貧富の區別なく普く善を行はんと已に興みする者のみならず未だ會て識らざる我同胞にも利さへ已を惡み已を害せんとする我敵にも善を行はんとする進歩的活動的勝利的意志即ち心靈上の生命是なりヨハネ曰く主は我儕のために生命を捐給へり之に由て愛といふことを知りたりとヨハネは果して基督の生命を捐て給ふ迄愛といふことを知らざりしか否彼は以上列舉せし通俗的意味に於ては之を知れり然れども余が前述せし如き高尚なる意味に於ては未だ會てしら

ざりしなり乃ち知る愛の特質なるものは主基督が万民のためにしかも我儕可憐なる道徳上罪人の爲に生命を捐て給ひし如き犠牲獻身的大精神なるを

第二 基督教の愛の本源

此純潔偉大なる精神的生命は何處より來るか無は有を生せず無機物は有機物を生せず生命は獨り生命より來るとは千古不易の一大真理なり然らば愛の生命は決して愛なき自己より發生し來らず又愛なき他人の心よりも生出せず只上なる愛の生命の大源神より來らざるべからずヨハネ又曰く我儕愛するは彼先づ我儕を愛するに由れりと即ち吾人を類の中は神の如き神聖なる愛の發生し來りしは神先づ眞愛を以て我儕を愛せしに由るとの意にして其人類の中に顯はれたる愛の本源を以て神に歸せしこと明なり此ヨハネの断定は合理的なりと思

はる何となればこゝに神先づ我情を愛すてふ原因ありて、そこに我情互に相愛すてふ結果の生ずるは原因結果の理法に於て當然のことなればなり而してヨハナは其神の愛の顯現を示て曰く神は其獨子(即ちキリストのことなり)を世に賜ふて彼に由て永生を得せしむ是に於て神の愛我情に顯はれたり……主(基督)は我情のために生命を捐給へり之に由て愛といふことを知りたりと、あゝ天下廣く宇宙大なりと雖も獨子を興ふるより大あるか、己の生命を捐るより深き愛あるか、東西古今忠君愛國孝子節婦の赤心と雖も之に過ぎざるなり而て世界の亡滅を憂て其御獨子さへも惜まらずして賜はりたる天父の愛と全人類の墮落を救はんがために己の身を十字架に犠牲にし給ひし基督の愛より大且つ深なるものあるか、あゝ此神と基督の愛は愛の尤も粹なるものにして又尤も大なるものなり此絶高絶大の愛を仰ぎ観るもの

誰か鄙吝の念を去て光明赫々恰も神の如き博愛殉公の義心を其心中に奮起せざるものあらんや、伯夷の風を聞くもの懦夫も廉に、匹夫も志を立て況んやこの至聖至大の基督の愛に感激するに於ておや是ぞこれ此罪惡に沈淪せる世界に此卑吝放縱なる人心の中に至高至潔なる眞愛の發生し來れる所以なり

第三 基督教の愛の價値

第一段に畧述したる如く愛はたゞ感情に基くものにあらずして意志の力に基くものなり故に愛は人間百行の動機にして衆徳之より生ず、保羅曰く愛は律法(即ち道德法)を全ふす又曰く愛は衆徳の帯なりと實に然り心中一片の愛あれば以て君に忠なるべく以て父母に孝なるべく以て兄弟に悌なるべく以て朋友に信なるべし愛あれば百善自ら生じ愛なければ百善たどひ善行あるにせよ皆虚偽に陥る之れ愛の貴き

所以の一なり加之愛は神の本質にして愛に由て吾人神を識り神と一
致することを得るなり智識に由ては吾人神に就て知ることを得信仰
に由ては吾人神を認ることを得然れども吾人神と相識り神と一体と
なり其間に親密なる靈通をなすことばたゞ此愛に由るヨハネ曰く愛
ある者は神に由て生れ且つ神を識れるなり愛なきものは神を識らず
神は即ち愛なればなりと之に由て知る真に神を認るはたゞ論理的推
究のみに由るにわらずまたこの愛の修養にあることを世の智識富麗
なる學者にして往々懷疑の中に彷徨して曾て安心の立場を得る能は
ざる所以のものは夫れ或は單に智識的教育にのみ偏して心靈上の修
養に缺く所あるに原するにわらざるか愛に由らざれば神を識る能は
ず是れ愛の貴き所以の二なり豈只之のみならんや愛はまた永遠の財
産なり夫れ有形の財産は廢るなり衣服器具家屋みな數年或は數十年

にして廢らざるを得ず快樂も廢るなり壯年の快樂は幼年の快樂と異
り老年の快樂は壯年の快樂にわらず然らば今日の快樂はまた明日の
快樂にわらざるべし智識も亦廢るなり今日の智識は十年前の智識に
わらず今日の智識十年の後に於ては舊套に屬するものまた多からん
あゝ地上の万物一として廢せざるものなし曾てペルシヤ王ゼルクセ
ス大軍(其軍勢無慮數百萬)を帥て 그리스を征せんとして將にヘレス
ポントの海峡を渡らんとするに際し海陸軍の大點檢を行ふに當り王
座上より海陸に充ち満ちたる無數の兵を見て頗る得意の体なりしが
忽ち忿然として泣けり侍臣之を見て大に怪み其故を問ふにセルクセ
スは答て今日より百年の後は此等無數の兵士は一人も生存せざるべ
しと想ひ覺へず落涙せりと言はれたりといへるが真に然り光陰は無
遠慮なり王公貴人にかゝはらず何人とも瞬間に携へ去て永遠の

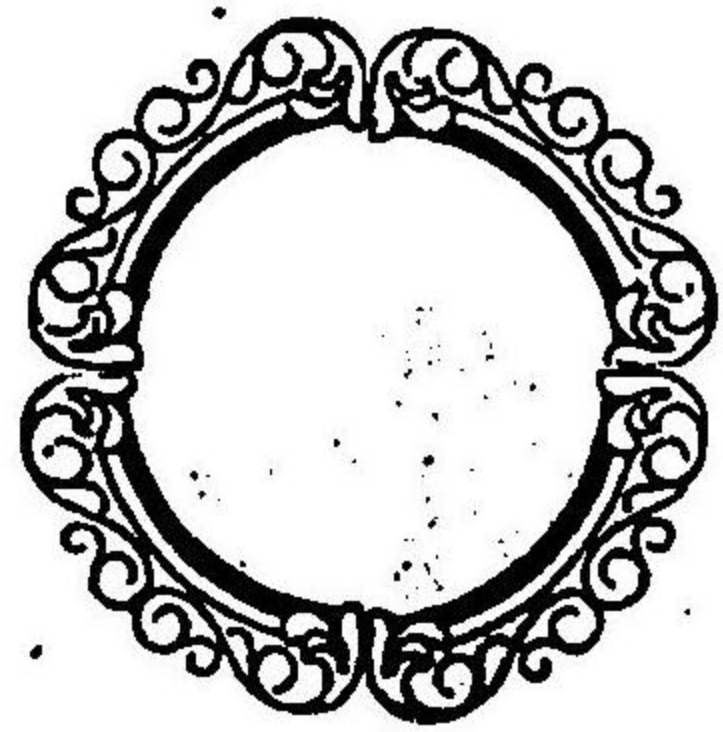
海に投せしむ、この轉變無常生者必滅の世界に在て獨り永遠に亘て變せず廢れざるものは何ぞや、獨りこの愛の大道ありて存するのみ何となれば愛は神の本性にして神と共に永遠に存在するのなればなり、此永遠の愛に合し永遠の愛に同伴するときは吾人の靈も亦永遠に存し永遠に生るなり、故に曰く愛あるものは永生ありと永生とは豈只生命のみならん、この愛の永生の中に無窮の希望あり快樂あり榮光あり、之れ愛の貴き所以の三なり

あゝ大なる哉愛や、天上天下何物か之に比すべき者やある、智識も財産も名譽も爵位も之に較するに足らざるなり、宜なる哉蘇國有名の學士ドラモンド氏の世界最大の者は愛なりと斷言せること、宜なり矣、千古の卓識、ポーロ氏の信仰と望と愛と此三者常に存す而して此中最も大なる者は愛なりと確言せること、然らば則ち吾人々間として最大最急

の要務は如何曰く

凡のものに勝りて爾先つ愛を追求めよ、

之れ豈に吾人々類の至貴至重の寶訓にあらざるや





實在的並理想的入生

下谷教會牧師

小澤孫太郎

人生とは果して何ぞや人は有機物中の一族として他の諸の無機物と區別せられ動物中の一族として他の諸の有機物と區別せられ宗教性・道德性・道理性を具備せるものとして他の諸の動物と區別せらるる生命を有するもの之を有機物となし生命を有して活動するもの之を動物となし生命を有して活動するのみならず宗教性と道德性と道理性とを有するもの之を人となす人に生命の始あり又終あり其始終の経過を人生とは云ふなり再言すれば人生とは宗教性と道德性と道理性とを有する動物の或る時間に於ける経過を云ふなり人生の起原は何如顯はれて進化論となり凡神論となり唯心論となり怪疑論となり有神論となる是皆人生の起原を解説せんと試むるもの

にあらざるはなし、進化論に於ては人生の起原は物質にして人生は物質進化の極度なり、凡神論に於ては人生の起原は絶対的實體にして人生は絶対的實體の一現象なり、唯心論に於ては人生の起原は心の發作なり、怪疑論に於ては人生の起原は知る可らず、人生は不可知物の一現象なり、有神論に於ては人生の起原は絶対的神明にして人生は絶対的神明の一被造物なり、

何にもせよ思想する所の者即ち人生を感得する所の者の存在するとは眞なり、泰西にはデカルトの之を証明せるあり、我國にては本居宣長が偶然之を証明せるありたり、曰く「心なき云物は他へは觸され共思念といふ事有てこれをしてしる」(くす花下卷十五丁の裏)と有之が故に喜怒哀樂愛惡慾の諸情動きて時としては歡娛我を忘るゝに至り又時としては憤懣已を知らざるに至り又時としては鬱鬱生を思ひに至る

或は老病死者の悲惨に撃たれて人生の何物なるやを究め眞如實相の論を述べて安心立命の地となせる瞿曇あり、或は不調和の宇宙は即ち調和の宇宙なりとの説をなして天を樂めるライプニツあり、或は万法唯心と觀せるあり、實利を説けるあり、天命を宣べたるありと雖も、要するに個人的及び社會的の人生の不如意より免れて満足なる人生を得んとする希望の結果にあらざるはなし、乃ち知る人は人生の起原の何に在るに關はらず到底實在的の人生に満足する者にあらずして或は寂光土、或は天國、或は黄金世界、或は佛、或は神の子なと云ふ語を以て顯はされたる理想的の人生に到達せんとするものなるを、
果して然らば實在的の人生とは如何なるものぞ、人は宗教性を有す即一種の依從的性質なり、此性質は先天的にして最も普通なるものなるにも關はらず宗教の分裂千萬限りなく派々其説く所信する所を異にし

て相争闘し各其自由を守る能はざるが如きは何ぞや、人が何の宗教を奉ずるにせよ其宗旨に應じて奉教者各神域に達せんとして達し能はざるは何ぞや、人は又道德性を有す而して常に至善を愛し至善に止まらんと欲して尙且つ止まる能はず、心裡に善惡二種の法あるを嘆せしめ又人の忌む所なる其惡法が却て人の好む所なる其善法を抑制するを痛ましむるは何ぞや、人は又道理性を有し宇宙万物の幽玄を追究して決して止まざらんとするに宇宙万物は頑として其秘密を示さざるは何ぞや、人は無限に知らんとするも人の智識の有限なるべきは………假令其智識は開發するとは云へ………必然なり、是を實在的的人生の一面となす。

更に他の一面より觀察し來れば、自由と制限と兩立せざるあり、利と害と相伴ふて離れざるあり、苦痛なくしては快樂なきこと恰も商業上の差引勘定の如きあり、社會が個人を壓伏するあり、母兒相離れて居ること數歩にして兒の乳を求むるとき母は乳房を懷中より現はして之を餓たる兒に示し兒が辛ふじて匍匐しつゝ、其膝頭に到れるとき痛く拳骨を其頭上に加へて乳をば與へざるが如き、又食物を求めて蟻を獲るが如き不調子あり、死を忌むこと最も甚しくして而も死に襲はれざるなく、佳人の薄命才子の多病義人の不運善人の災禍惡人榮へ倭漢傲るあり、更に甚しきは自ら善人と信じ己の爲す所を善と信じて而して惡をなす惡人あり、直言は忌まれ疑はれ曲言は喜ばれ信せらる、桑田碧海の嘆豈史の上に於て見るのみならんや、誤解し誤解される、こと果して幾何ぞ、荒涼たる墳墓の下、千古に亘りて一人の辯護者を得ざる人靈の汚名に泣く者もあらん、天道は果して是か非か、是を實在的的人生の他の一面となす。

要するに實在的の人生は矛盾なり不調子なり不安心の場處なり佛者の所謂六道の辻なり一休和尚は歌て曰く

世の中は實じやうとくじや苦しや樂じや

香川景樹も亦歌て曰く

あらしのことみな夢とみうるかあ

寝るまばかりや我世なるらむ

其他幾多の詩人と宗教家と哲學者と平民とに由りて實在的の人生は不

完全不満足を訴へられ或は判然或は漠然理想的の人生なるもの、人類に要求せられつ、諸般の成形的哲學と宗教とは生れ出でたり。

理想的の人生とは個人的に之を云へば神の子と云ふも其一佛と云ふも亦其一なり社會的に之を云へば天國と云ふも其一救光土と云ふも其

一黄金世界と云ふも亦其一なり理想的の人生は曾て實在せざるなり壓制なく不義なく罪惡なく矛盾なく不調子なく苦痛なく死なく不安心なく誤解なく自由に怪樂に正義に至善に安心に平和に宗教と哲

學とが其傲慢を逞する能はざるが如くに在る所のものを理想的の人生とせず再言すれば理想的の人生とは人の思想中にのみ存在して人の

思想の及ぶ限り完全なる又満足なる人生を云ふなり。

人が實在的の人生に満足すること能はずして汲々乎として理想的の人生を追求するや恰も兒輩が蜻蛉を追捕せんとするに似たり指頭將に其

物に及ばんとするが如く思はるゝときは則ち其影遙に彼方に在るなり千代女史が所謂とんぼつり今日はとて迄行たやらも此趣向を寓し

て解さば彼女はポープの如く哲學的詩人と云ふを得べきか此の如く理想的の人生は切に人に要求せられつゝあるにも關はらず人は到底實

實在的并理想的の人生

四十一

在的的人生に満足する能はざるにも關はらず所謂理想的的人生が遂に人間のものにあらざるは何ぞや、是又實に人生の一大矛盾なり此の如く不満足不安心なる實在的的人生に處する所の我等は遂に此一大矛盾の爲に不安心なる生涯を終る可きか官に在りては罷免を恐れ實業を執りては失敗を憂へ富ては之を失はんことを思煩ひ貧しては富まんことを苦慮し學者の社會を通して宗教家の社會を通して總ての社會を通して生存競争の爲に擾亂され疑懼の鬼は造次顛沛も人生を離れざらんとす天國は何處黄金世界は何處寂光土は何處佛なる者ありや神の子なる者ありや。

或は曰く憂ふる勿れ我等が其目的に向て勉め進まば遂に黄金世界に達すべし即ち此の如くなさば理想的的人生は實在となるべしと或は然らん然りと雖も人は之を己に得るにあらざんば満足する能はざるな

り十代の後に天國成ると云ふを以て満足するとは能はざるなり百代の後に寂光土成ると云ふを以て満足するとは更に能はざるなり況んや千代万代の後と云ふに於てをや。

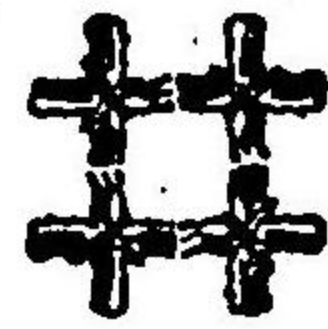
或は云ふ神の大慈悲を信じ因果の理を諦め「艱難にも欣喜をなす」秘訣を得ば安心は我有なり理想的的人生は其人の有なりと是蓋し個人的に安心なるもの又幾分か満足なるものなるべしと雖も十分満足なるもの即ち理想的的人生にはあらざるなり加之社會的には尙幾多の不満足依然として存すべきなり。

果して然らば理想的的人生は遂に得る能はずして「寢る間ばかりを我世」と觀じ「むちやくちや」のはか一の眞理を見出す能はずして終らざる可らざるか否完全なる哲學と完全なる宗教とは人を導て理想的的人生に入らしむる所の兩の門なるべし即ち人が此兩の門の中何れの一より

入ることも理想的の人生の實在となれるもの、即ち之を個人的にしては佛
 及び神の子、社會的にしては天國、寂光土、黄金世界に達するを得ん、釋迦
 は哲學より、キリストは宗教よりせり、別言すれば、眞正の宗教及び哲學
 は實在的の人生と、理想的の人生の間に在る矛盾を解説調和するを得べし
 然り而して如何なるが、是眞正の宗教及び哲學なるやと云ふに至ては
 之を不言に置かん、否言ひ易からざるなり、只一言すべきは眞正の宗教
 と眞正の哲學とは決して齟齬するものにあらずと云ふこと一なり、哲
 學は智者の宗教、又抽象的の宗教にして、宗教は平民の哲學、又具體的の哲學
 なりと云ふこと二なり、智者にあらざる者及び智を哲學に専らにする
 能はざる事情の人は、須らく大師宗の既定説を信奉すべしと云ふこと
 三なり、凡智の者が妄りに智者振りて、哲學を弄し而して、大師宗の既定
 説を避くるは、魔道に隨落する始なりと云ふこと四なり、眞正の哲學に

倒達することもなく、大師宗の既定説を信奉することもなき人は、地獄
 を出づる能はずと云ふこと五なり、大師宗の既定説を信奉するにあら
 ずして、只時の流行に追はれ、徒に名を其門下に置くが如きは、依然六道
 の辻に立つ所の餓鬼たるを免れずと云ふこと六なり、要するに人が理
 想的の人生に到達せんには、大智者は眞正の哲學に由るに在るべく、凡智
 者は大師宗の既定説を信奉するに在るべきなり。





希望

東京青年會

丹羽清次郎

希望は我生命なり、我救ひなり、我光明なり、希望にして共に在らば芥子の種と雖其の形の微少なることを憫みず、淺少なる流水と雖其細淺なるを厭はず、吾人も亦現今我が品性の卑賤なることを痛まざるべし、蓋し希望は吾人に與ふるに大成發達の理想の賜を以てすればなり、腐儒者とは何ぞ、希望其中に燃へざればなり、守錢奴とは何ぞ、希望其人を救はざればなり、年少老朽翁とは何ぞ、希望其心を活かさざればなり、乞ふ彼等に希望を與へよ、然らば骸骨の如き彼等も肉血を得、活氣を得、光焰万丈の氣概を吐き、學問、財産、歲月を大用するに至らん、
亞烈危散度大王を見よ、彼れマケドニヤを出で、ヘレスポンドを飛越へ、大舉してダリラスの軍勢を敗り、小亞細亞を乗取るや、領地を分ちて悉

く之を將師等に與へて自らの爲めに遺す處なし將帥等怪み大王の版圖何處にあるやと問ふ大王叫びて曰く希望之れ我が版圖と嗚呼何ぞ其言の壯大なる

又聖徒モーゼを見よ彼れ壯年に至りパロの女の子と稱ばるゝを辭み俗世の快樂を受けずエジプトの貨財を退け而して奮然決起神の民と共に苦難を受け遂に四十年間頑冥險狂なる徒を教導して其烈志を挫かざりし所以のものは何ぞやビスガの山上雲烟一抹の裡儘に認めし伽南の地に達せんどの希望此れのみ

然りと雖も希望天より降らず地より湧かざるなり然らば彼れ何處より來る吾人は云はんどす只不平不満の心に於て生ずと吾人は漫に己れの地位の卑さを嘆ずるもの妄に先進者を罵詈するものゝ心に皎烈なる希望の光明ありと云はざるべし裏自ら省み私利の念慮我が行ふ

萬事を支配し學問修徳の道虚名の陷阱に落ちて其光を失ひ無智盲頑は幾多の事業に失敗す思ひ此等の事に及べば慚愧不平胸に滿ち決して強ひて抑ゆべからざるなり孟子曰天將降大任於是人也必先苦其心志勞其筋骨餓其體膚空乏其身行拂亂其行爲所以動心忍性曾益其所不能と古往今來忠誠公議の人士卓勵豪毅の豫言者拔山蓋世の大事業家神知靈妙の大發明家の出づるもの豈に偶然ならんや横井小楠ジョンホス、ロポルトソン、ビーチャル、ゴルドン等の如き皆決して暖衣飽食の人にあらず皆先づ大に自らの爲めに不平不満を懷き先づ大に自らの爲めに痛悔奮勵せし人にあらざるはなし、吾人の不平不満なるもの豈に曾に自己一身の上のみならんや社會の實狀を觀察し來る時は利慾の大勢力天下を席卷し高潔なる義人昊天に號叫して其の不運を哀訴し助けなき孤兒殘忍なる婢僕舌頭の刃を

受けて途に餓せんとす而して一方に於ては酒池肉林の中に管弦舞蹈の聲を聞き、我たる教習に錦裳繡衣の士女の出入するあり、實にや詩伯ロツセル、ロウエル、比倫と題せる詩中に、基督教世に來りて高大壯麗なる教會を見て喜び、更に悲み下邊を指し、已れを觀迎する者に問ふて曰けるは、此教會の基礎は貧民の血と孤兒の骨に依りて造られたるか、余は其哀聲を聞くに堪へずと、又信者の基督に向ひ、教會堂内の正面の壁に掲げし基督の肖像を指し示し、主の肖像は我等は斯の如く尊重恭敬すと曰ければ、基督は繯を纏へる手組工人と可憐なる孤兒を呼んで、彼等の中に立せ、我が衣汚れんとて退歩する士女に對し、汝等は此二人の如き肖像を我れの爲めに造れよと告げたりと、實に社會の現狀を描出せしものと云ふべし、横井小楠、ジョンホス、ロポルトソン、ピーチヤル、ゴルドン等の如き至誠あるの輩、豈に慨慷奮起せざらんとすと雖

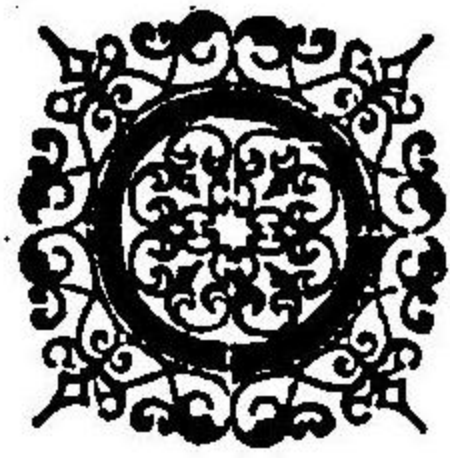
も得んや、

知るべし、大希望の人は必ず先づ大不満の人たるべきを、蓋し望を見れば、已に望なし自ら智とし自ら足れりとし、自ら徳ありとするもの如何で、希望の人たるを得んや、徳川三百年の治平に馴れ、武器架上の塵中に、藏れ柔弱なる文學流行し、所謂入則無法家、佛士出則無敵國、外患の姿ある維新數十年前の日本に、何の大事か望むべき且つ天は浦賀一發の砲聲を以て、大に我國の民心に大不平大不満を惹起せし爲めに、遂に明治の革命を來せり、豫言者マラカイ后ユダヤの曠野長く勁風刻烈なる愛國敬民者の聲を聞かず、民心輕舉浮薄に流れ、國家の基礎たるべき中等の公民、バリサイ黨すら禮儀三百威儀三千、只外飾儀文に拘泥せり、斯の如きイスラエル人民に、何の大事をか求むべき、則ち天大豫言者ヨハナを起し、イザヤの如き精神を以て、万民の改悔の教を述べしめたり、不平不

満なる哉吾人は自らに對し又社會の實情に對し極めて及ぶ丈け不平
 不満ならざるべからざるなり嗚呼不平不満は是れ希望の母たる哉
 然りと雖只大不平大不満を懐くもの豈大希望の人たるを得んや吾人
 は別に一の信仰あるを要す即ち神を信仰する是れなり神を信せずし
 て大不平大不満あるものは恰も冕冠なき王の如し彼何を以て堂々た
 る王者の威儀を備ふるを得んや信仰を備へざる大不平大不満何を以
 て皎烈偉大なる希望を生むを得ん蓋し神を信すとは是れ吾人の最善
 最高の理想を懐けるを意味するのみならず吾人は必らず其理想に達
 し得べきことを信するを謂ふなり或は神を信せざるものと雖も各其
 理想を懐き以て或は絶望の境遇より救ひ出され或は慰勵を受ると有
 と雖も彼等豈に正義仁愛なる神を信じ正義仁愛の必勝を信じ人類の
 發達を信じ社會の進歩を信じ此社會は神の王國となり仁愛寛容正義

喜樂其中を支配するを信するものに若かんや神を信することに依り
 吾人は初めて自己の價値を知り其發達を信することを得而して自己
 を圍繞する境遇如何にあるも他人は如何に吾人を輕視するも吾人は
 志望てふ羽翼を驅りて高遠出達なる天地に飛躍するを得べし仁愛正
 義の神人類と共に在りて離れざるべしどの信仰あり始めて仁者の成
 功義人の必勝を信するを得て現今社會の事情如何に酸鼻に堪へざる
 ものあるも人類は如何に未だ不完全なるも希望てふ光明は能く外觀
 を透して社會と人類との眞象を吾人に明示するを得べし信仰は豈に
 雷に不平不満より吾人を救ふのみならんや更に吾人をして大不平大
 不満を抱懷せしむるに至るべし蓋し信仰は吾人に人類の價値と人生
 の秘義を學ばしむるに至ればなり去れば吾人は不平不満は希望の母な
 りとの話を代へて信仰は之れ希望の父なりと云はん又我に希望を與

へよとの語を代へて我に智慧能力の源なる神を興へよ然らば吾人は
凡てのものを損するも尙ほ之を糞土の如く意へりと云はん



聖書

中央會堂宣教師

コーツ述

突然に托せられ用意の暇もなく今宵諸君の前に講演することゝな
りたれば固より十分に此大問題を論ずること能はざるべし然れど
も一人の基督信徒として余は暗夜の燈たる誘惑の時の力たる悲め
る日の慰藉たる又苦める際の佑導たる斯の貴重なる聖書世界中最
も古く最も汎く知られたる且最も廉價に沽らるゝ所の斯の驚くべ
き聖書につき一言の語るべき所なきを得んや是れ予が予に指命せ
られたる此大主意に基づき聊か所存を述べんと欲する所以なり
抑も聖書が萬國文學中最上無二の地位を占むべきものたる事は其書
物の性質より推して容易に知らるべき所なり蓋し聖書は人心の自然
より發する所の渴望に應へて眞神を啓示する書なればなり夫れ如何

にせば此宇宙を統一し給ふ所の眞神を知るを得るやとは是れ恒に人心を離れざる問題にして何れの時代何れの處に住める人類も皆均しく是れが解釋を望まざるはなし、聖書は即ち其問題に十分なる答解を下だしたるものなり。

斯様に格段なる意味に於て聖書は神の道たることを唱導すると雖も、古來傳はれる多くの秀でたる經書即ちヘルシヤの「ゼンドアヴェスタ」、インドの「グプーダ支那の孔孟の經書、回々教の「こーらんあるいは又希臘の聖哲クラテス、プレトー及ビアリストートルの諸書の如き又日本の歴史にあらはれたる多くの賢哲の遺書等を悉く貶評するにあらず、是等諸書の教ゆるところは是れ吾人人類に關する切要なる眞理にして吾人の本分と運命とを明にせるものなり、且つ是等の諸書は其々そが本國の民に有益なる感化を興へたるものなれば、天下の基督教徒たるもの特に之を敬愛すべきは勿論是れに由りて吾人に興へられたる光明につき神に感謝せざるべからず。

是等の諸書を著はせる賢哲が教化せられし所の神の靈と聖書記者に天啓を興へたる神の靈とは全一なり何となれば眞理の本源は一なるが故なり、神を知らざりし賢哲が神の靈の教化を受くるとは一通信に難きやうなれ共神は眞理の源なる故に彼等賢哲が謙遜忍耐して或度まで眞理に達し得たりとせば即ち夫丈靈の教化を享たる者と云べし然るに人性の孱弱なるところより是等の賢哲と雖ども或は自己先天の氣質に僻し或は感情に驅られ或は剛慢に走り或は固陋の習性、空想或は又敗壞せる徳性に原因して純粹なる眞理の容色を啓示することを得ず往々誤謬或は執拗の醜態を其中に加へて吾人に示すこと是れあるに至る是を以て余輩は彼等につき常に感じて謂へらく眞理の大

靈ありて彼等に眞理を默示したりしかども同時に亦誤謬及び惡の強き力を逞くするありて堂々たる眞理及び善を朦朧の裡に蔽ひたりと。聖書には果して誤謬なきや否やの問題は隨て吾人の頭上に落ち來たるものなり然り聖書の有する紀事中に往々事實の行違なきやを保すべからず然れども是も今尙ほ議論の中にあることにて何人も未だ明かに聖書の中より誤謬を指點せし者あらず科學的に歴史的に聖書を攻究する者に依て他日吾人は果して事實上の誤謬聖書記事中にあるや否を確定し得べし。

然れども聖書の記事は誤謬あるもなきも聖書の眞價に差したる關係を及ぼすことには非ず如何となれば燦然として聖書に輝く所の大目的即ち聖書が吾人々類に神を默示する事の正確なる又凡て宗教及び道德の大問題を講ずるにあたりて聖書は一の誤謬をなさざることを等

に於ては吾人之を証明する爲めに別に堅牢なる理由を掌握すればなり聖書記者が特に神靈の佑導を享けて誤りなく聖書を著はせしことを信するも亦之に因るものなり。

吾人は天下到る處に道德上の金言を發見するを得即ち個人的社會的政治的國家的生活の上に切要なる實用的眞理の美妙に言ひ顯はさるゝものを見るなり然れども獨一の眞神と被造者との關係に就きては聖書を除くの外一も他に見るべき教あらず是れ吾人が大に注目すべき一點ならずや。

神の高潔なる實在者なること並に其全き仁慈と思愛と罪を除き給ふ能力とは聖書の外曾て何處にも認識せられざる處なりまづこれを孔子に問はん歟天は吾れ之を知ると能はずと答ふるならずや然らば更に古代に於けるギリシヤの最大哲學者よし世界中の最大哲學者にあ

らずとなすも「プレート」に質さん、彼は上帝のことを喋々と述ぶるもその言ふところ果して真正の實存者なる神なりや否や疑はしきところなきにあらす、斯の如く神に就いて哲學者の所見區々にして定らざるは是れ「世は已れの智慧を恃んで神を知ること能はず」といへる使徒ボロの言の確實なるを證するものなり、假に吾人は考究の届く限り神を詮索すると想へ而して又大に搜索し得たることありと定めよ然れども其探知し得たるどころ果して真正のものなりや否や吾人これを確定すべからず、故に神の默示なくんば吾人は到底神の本性及び其吾人に對する關係如何を究むることを得ず、唯吾人は暗々裡に僅かに是を揣摩するに止まらんのみ、然れども吾人は今聖書中に在る處の神の默示に基づき吾人の神に關して深く知らんと願ふ處のものを明かにすることを得るなり、即ち其中に教へられたる教義又其中に記述せら

れたるところの神の攝理に徴して、吾人はこれを大悟するなり、請ふ予は簡短に其中に教へられたる事の大要を擧げん、然らば聖書の教ゆる處のことは何なるや。

第一 神と此世界との關係 此世界は神の創造に係り決して空より偶然に顯出せしものにあらず、無始無終なる永遠の存在者は神のみにして神は自存者なり、舊約書に神の名をエホバと稱するは此意義を示すものなり、萬物の成らぬ前已に存在して宇宙間の勢力の本源をなすものなり。

第二 吾人々類に付て 人は神の徳、智慧及び其の靈性に倣りて造られたるものにして、且つ善惡孰れを撰むも勝手なる撰擇權を與へられたり、然るに人は善を撰ばずして惡を撰べり是が爲めに罪と死とを此世に持ち來たし、吾等の凡ての苦痛亦これに伴ひて來れり、人間の數増

殖し亦罪を犯したり神は忍んで其悔改を俟ちしかども彌々神に遠ざかり其望絶えたるを認め大洪水によりて刑罰を加へたり此事實は多くの國々の古き記録の中に吾人が認むるところなり而して聖書は明亮に此洪水は罪の刑罰として臻りしものなる事を教ゆ此際難を免れて生残りしは單に八人の義しき者のみこれノアと其家族なり然るに此家族増殖するに隨ひ獨一の眞神を離れ漸く墮落し妖雲限り毒氣漠々人類腐敗の大危機又將に落ち來らんとする勢を呈するに至れり

第三 撰民の意味 神は其尤も善と見給ふ一人を撰びて其被撰者及び其後裔は飽迄も眞神禮拜を保續すべく且つ爾來時に應じ機に臨みて漸く明かされん神の默示を享くるものとせり此企圖たる決して此一族のみに限り天恵を興へんとはあらずして却て此一家族より延びて萬國萬民に洽からしめん爲めなりき扱て此れに當るものとし

てアブラハムなる者撰ばれ其後裔は神の撰民即ちユダヤ人(デエース)となれり然らばユダヤ外の民を神は措て顧みざりしか否々神はアブラハムの後裔にあらざる民の中よりも屢々徳の高きもの或は宗教心に富める人物を起して夫等の智慧と熱心とに従ひて眞理を闡明せしめ而して其當代及び後嗣の民に之を教へしめたり然れども左に述ぶる所の條理に基づきユダヤ人は特別の意義に於て神の撰民なりき。

ユダヤの人民は神の眞理の倉庫にして獨一眞神の禮拜を習はしめエホバに事へる民は如何に幸福なるか又之を禮拜する所の人民は如何に他國民に秀づる所の高貴なる品性を有すべき乎を世に證明し以て活ける眞の神に萬國民を誘導せんが爲めに立てられたるものなり

更に又ユダヤ人民なるものは神の万民に降し給ふべき贖罪者たり

救主たる者をこの間より出さん爲めに特に備へられたるものなり
 第四 撰民の歴史(舊約聖書)——聖書は前後二部より成る其前部を舊約
 全書他を新約全書といふ

「舊約全書」は即ち一般偶像禮拜者間よりアブラハムを撰み之を樹て、
 地に於ける己の代表者となせし時より此民に於ける神の種々の處置
 に關する物語を以て殆んど全部を占むるものなり、換言せばアブラハ
 ム民族の運命の遷變浮沈を網羅せる歴史なり其始めエジプトに在り
 ての幸福安寧……一轉陥りて奴隸と成りしこと……然るに全能
 の手に依り慈悲の腕に據り遂に其苦境を免れ得し始末……彼等は
 神より聖なる法律を興へられしこと……彼等は神の示せる新天地
 に向て久しく導き導きまに、漂泊せること……果して其新天地カ
 ナンに到着せしこと……彼等はバレスタインに在りて異教の汚漬

に浸されざりしこと彼等は其神エホバの旗下に戦ひ危急を千辛万苦
 に救ひて遂に其地を征服せしこと……是より三百年前に亘れる士
 師の政治の續きしこと……尋で列王の時代となりダビデ及ソロ
 モンの治世に於て彼等の進歩發達富貴及び榮華の其極頂に達せしこ
 と……其後彼等分裂して二王國となり茲に彼等が神意を會得せざ
 りし爲め漸次に衰枯凋落の時代に推し移り殆んど三百年を經過せし
 こと其後ち敵の爲めに虜にせられ凡て憫れむべき慘狀に陥りしこと
 程經て彼等の一部分本國に歸りしこと……然るに彼等の最多數は
 世界に散亂して其國体は全く破れ今日に引き續きしこと……彼等
 は斯の如く非運の境遇に沈みしかど尙ほ來るべき救主を俟ち望み居
 れること等吾人は凡て斯の如き彼等の歴史を閱覽し如何に此撰民が
 神の高き榮の約束を享くるに足らざりしかを想へば吾人は往々神が

其始め或る他の國民を撰んで代表者たらしめたらんには或は却て好結果を奏せしならんとの疑念を懐く者なり然れども神は其當時に於ける最良の人材を撰擇し給ひしものにて且つ最良の方法を以て彼等を誘導し給ひたることを記憶せざるべからず。

彼等は特撰の民たり然れども其一朝神靈を侮り是に違ざるや神は更に假借する處なく彼等を他國民と同一般に處置し公然其罪を罰し給へり而して又其罰の格段重かりし所以は畢竟彼等撰民の神に對する責任の重大なるに之れ因れるものなり。

如何をか撰民の大罪といふ曰く彼等の神は靈なるが故に彼等も亦靈を以て之を拜し之に事ふべきなるに彼等は偶像禮拜に流れて復た眞神に歸ること殆んど出来得べからざるに到りしこと是なり彼等は手以て觸るべく眼以て視るべき物質を採て神の標號と作さん事を欲せ

り斯くて神は一度ならず二度ならず宛然父たる者の子に於けるが如く彼等を救へ玉ひて己の靈たること又彼等の靈もて拜すべきことを示したまへり然れども彼等は遂に最早其眞理を領會すべき能力さへ失ふに至れり夫れ彼等の愚なりしこと斯の如し故に神は新約書に在るが如き完全なる眞理を舊約の人民に教ゆること能はず只彼等の活用し得らるゝだけ聖旨を啓示なし玉へり。

神は首めより吾人々類に己の本性本体に係る十全の默示を與へ給はざりしなり是れ實際吾人を益することなきこと恰も幼童の頭腦に高尚なる教理を注入せんこととの徒勞なるが如くなればなり。

抑猶太國民は前述の如く罪科の故を以て其頭上に落來りし種々の慘憺極まれる現世的不幸非運に遇ひながら尙ほ其最多數は恬として敢て改悔の氣色なき程に教化すべからざるものなりし然れども其間に

在りて常に少數の義人の其時世ニ超脱せる者あるを見るは不幸中の幸と謂ふべし而して是等の義人は斷乎として已を深く守り其罪に醉へる國民を警醒することを努めたり又彼等は特に神より高貴なる真理深遠なる神の奧義を辨知する朋を興へられたること舊約全書の詩篇及び後代の預言者の諸書を繕きて之を一讀するも容易に之を理解すべし。

第五 撰民の期せし所萬國民の希望せし所の者世に來たれり夫れ神は固より大なる靈に在ますなれども吾人は何かな神を代表するものゝ我が眼前に在れよかしと願ひ此手接し此眼視る所の神性の肖像を需むること世界各種の宗教が禮拜者各自の想像に従ひ木石及び金屬等雜多の物質を以て種々異様の形体を作り是を崇拜する事實に照して明かなり。

吾人今翻て猶太歴史に遡り篤と神ニホバの攝理及び啓示を致ふるに始め神は其撰民に何たる形像をも興へざりし然しながら時満つるに及んで神は其人民の渴望に應へんが爲め自ら人体を取りて其民間に正しく現出し玉ひたり聖書は萬民の希望彼に於て成就せしことを謂へる如く此神人は猶太人の豫期せし所の者たるのみならず又萬國民の希望せし所の者たるなり而して此神人は猶太人の一處女マリヤの胎より出でたりしを以てアブラハムの子孫たるの故によりアブラハムと其後裔に譽あらしめたりこの神人とは即ちイエスキリストなり彼は人の如く成長し人の如き生活を營み正さしく人間にてありしが同時に尊貴なる神の靈性を備へ給へり斯の如く眞の人に於て眞の神たるイエスキリスト世に現出して汝等最早何様なる偶像にも其前に膝を屈する勿れと教へ玉へりキリスト曰く我を見しものは即ち父を

見しものなりと、キリスト會て三十三年の日月を地上の一生涯となして存在せし間には成程當時の人々はキリストの人物風采に注視せしならむ然れども恐くはキリストの眞相を見しものは殆んど皆無なりしなるべし然るに如何なる彫刻師も如何なる畫工も是より眞を穿ち眞に迫れるものを會て寫し能はざりし處の此神人の美はしき肖像を吾人は今日新約全書の四福音書中に見るなり何んと吾人は無益なる偶像の我眼前に立つを要せんや

第六 イエス、キリストの言行(新約全書)扱て是れよりナザレのイエスの生涯言語及び事業の物語に入る前に先づ吾人の了し置くべきとはこのナザレのイエス、キリストは舊約と新約を連結する所の鍵鎖なる是なり、その鍵鎖たる所以は前に述る如くユダヤ人の永く忍んで待ち兼ね居りし所の救主にして王たるもの即ち舊約に於て古來の立法

者聖人及び預言者等の異口同調に語り俟ちし所又舊約の儀式禮法の全系に依て其一生を暗に表せし所の者今や實際にイエス、キリストに於て現實し來れる事に在て存するものなり

イエス、キリストは猶太國中貧村を以て鳴渡れるナザレ村の一賤家に生まれ父よりの業として、つまり大工職を營なみ渡世しけるが斯くて歳三十に及んで志ざしを立て、師となり謙遜に人民を教へたり而して彼の語れる處人の語れることとなりざりき彼はまた常に悲める者苦める族に向つて驚くべき同情を表して直に彼等に慰と悦を與へたり、彼れ神に在ませど斯様に甘じて吾人の爲めに僕婢の如くなり殆んど寢食を顧るに暇なかりしは常に吾人の爲めに勞せしが當時猶太教の悖徳なる教法師や學者の憎惡嫉妬する所となり終に忌わしき十字架に釘けられたり基督の此献身的犧牲的生涯は神の愛を十分に啓示

せしものにて神の神たることを吾人に明示せるものと謂ふべし萬民の仰慕する所の神の心茲に於てか世界に發表せり。

第七 キリストの十字架抑々神の人類に己のれを知らしめむとし玉ふ目的は、人性の根底なる最深の希望を満足せしめて其靈性的生命を完全ならしむる爲めなり。然るに人類は前に述べるごとく惡を撰び善を捨て惡魔に近づき神に遠かりたることなれば罪の人類と聖なる神との間に自ら大懸隔の生じ來れること明かなり。此時に當り神は尙ほ人類を捨て給はず如何にもして神の尤も喜び給ふ所の家族となさんと欲す。是れイエスキリストに由りて神の默示し給へる聖旨なり。然れども如何にして罪の人類が聖き神の家族たるを得べきか、これ人智の解すべからざる問題なり。

此恐しき問題は實にイエスキリストの十字架に由て神の答解し給へる所なり。此十字架に由て罪の赦しの神意發表せられたり。蓋しイエスキリストの十字架の死は單に布教の爲に犠牲となりし殉教者の死たりしのみならず是に由りて聖義と罪惡神と人との一致を遂げん爲めのものなりき。キリストの使徒パウロ云く神はイエスを信するものを義人とするとも尙自ら義たるなりと乃ち知るべし神の企て給ひたる救罪の方法は神の義を損はざる恩恵の行爲なることを又吾人は基督の十字架上に於て神の至高至大なる愛を明確に認め得たり。神は其愛を太始より舊約の全時代を貫き絶へず漸を追ふて世に示せしも、新約の血によりて其全豹を明にし給ひたりき。蓋し人類こそ其罪の處罰を受けてカルバリの十字架を負ふも當然の分なるべきに神は却て無幸なる神子を以て吾人の罪の代贖をなさしめ給へり。聖書に曰く人を友の爲めに生命を損つるは是より大なる愛はなし。又キリストは我

等の罪人たる時われらの爲めに死にたまへり神は之によりて其愛を彰し給ふまことに彼はわれらの病患をおひ我憐のかなしみを擔へり然るにわれら思らく彼はせめられて神にうたれ苦しめらるゝなりと彼はわれらの愆のためには傷けられわれらの不義のために碎かれみづから懲罰をうけてわれらに平安をあたふそのうたれし痕によりてわれらは懲されたり彼はくるしめらるれどもみづから謙たりて口をひらかず屠場にひかるゝ羊羔のごとく毛をさる者のまへにもだす羊のごとくしてその口をひらかざりき彼れ木の上に懸りて我等の罪を自から償ひたまへり也。

第八 キリストの復活 キリストは苦るしき十字架の死を遂げて確かに墓に埋められ其墓は尙ほ羅馬の兵を以て嚴重に警衛せられけるが處でキリストは三日目に蘇りて不可思議にも墓より出で、屢々弟子

達に現はれ万民の心に開設せんとする神の王國の事に就きて語り斯て四十日間彼等と偕に在り其後天に昇りて今日も尙ほ全能の神の右に坐し其贖罪より湧き来る所の極救の清泉を吾人に頒與し給ふものなり吾人若し彼を信じて進まば古今萬國の王者も聖哲も立法者も又預言者も與ふべからざるところの靈の活泉の賜を享け新生命を養ふことを得るものなり世に道德の師宗教の祖と稱せらるゝ大人物は其教と其傳記とを殘して逝れり然れどもキリストは教と傳とに加ふるに自己の復活力を以てし之を信者と與へて新生命の途を歩ましむ扱て既に世を逝れる人が地上の吾人に感動力を與ふると云ふ事は之れ實に不可思議の事柄にして哲學者の甚だ答解に惑へる問題なりと雖ども今學問上のことは姑く措き兎に角事實として吾人は之を認むるを得即ち世界の歴史に前後相繼で現れたる著しき出來事は往々先進

者の精神が冥々理に在つて後進を刺衝して之に動力を與ふるに因りて初めて成りしことわりしにあらすや、更に進んでイエスキリストに關し吾人が事實として知る處のものはキリストの今日も幾千万の人心中に在りて活ける實在者たることなり夫れ死なる事は靈魂と肉體と相離るゝことを謂ふものなり、その如く亦吾人の靈魂と神と相離るゝならば靈の死を致すものとす、故に若し吾人の罪釋かれて更に神と相合ふに於ては吾人再び靈の生命を享有することを得るなり、吾人の罪赦さるゝ時は吾人の靈新しき生命を享有すること是れ世界に於ける眞の基督信徒の皆同じく經驗する所なり、聖書に謂く人基督に在る時は舊は去りてみな新しく作なりと又曰く罪に就ては死せるものされど義に就きては生けるものと。

第九 永世の教 永世とは單に永續する生命を謂にあらす永遠神と

信に生存するの謂ひなり、吾人が罪の赦しに因りて得たる新生命は固より永遠に續くものにして吾人は信仰の續く限り是れを享有し得べきものたり而して此新生命を享けて吾人の心靈漸く發育するに及び至く神を識り得るに至るものなり。

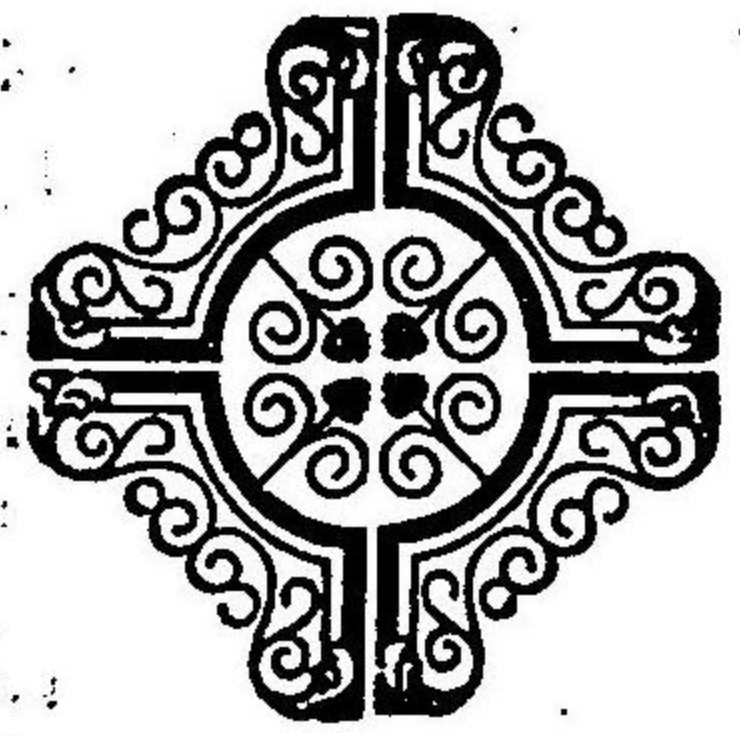
心の清きものは福ひなりその人神を見ることを得べければなりとは是れキリストの山上の垂訓なり、眞實に又實際的に神を識ることは眞想のみ是れ恃む所の哲學者よりは却て冥想に生眞なる基督信者の之を能くするものなり如何となれば後者は信仰に依て享けし赦罪と復活の確實なる證明によりて神を認むるものなればなり。

神に關する最高尙なる智識は決して自己の智慧及び能力をのみ恃みて心の驕慢なる靈に示さるべきものに非ず却てキリストの曰へる如く稚子或は心の虚きもの即ち神に對して謙遜なる者に示さるべきも

のなり吾人はキリストに頼り罪を釋かれて神と相交り新生命を享くるに至る是に由り神は其秘密を吾人に啓示し給ふなり且つ擧げられて神の子となり天父の家族に入るの特權を與へらるゝに由り吾人は神と偕に在るの幸福即ち自由を享くことを得るなり聖書に曰く永生との唯獨の眞神と及び爾の遺はし給へるイエスキリストを識る是れなりと。

夫れ斯の如く聖書の世に著作せられたる所以は万種の智識中最高位を占有する所の神に關する此智識に吾人を到達せしめむが爲めなりされば是れ聖書は決して一種の呪文的に捧讀すべきにあらず愚かにも之を拜むべきにあらず又迷信的に之を尊重すべきものには非ずして之れ偏へに此最大目的に向て吾人を指導するの寶書なり今日世界殆ど到處此聖書すでに備はらざるはなし然るに尙ほ吾人は此書を讀

みて神を識り神を信する事をせざらんか嗚呼これ此尊き書を吾人に與へ給ひたる神の恩恵に背く者と謂ふべし然らば則ち吾人は宜しく聖書の指導に従ひ神と基督を信仰して罪の赦を享け以て「子を信するものは永生を得」るなる人生の眞快樂に入るべし單に之を享くるにあらずして永遠に之を保持すべし終りに諸君に問はん
汝神の子を信するか



基督教の起原

駒込教會牧師

小林光茂

一條の河水漫々として流れ來れば忽ち源泉の何處に在るやを問はんことを欲し、奏樂の嚮曉として耳朶に響けば其俗人の譏たるを知らんことを望む斯の如きは是れ理性の欲望にして吾人の抑ゆべからざる性情なり今吾人は此理性の欲望に逼られて基督教の起原を探求するとはなれり即ち日本文の聖書日本の基督教會として吾人の目前に流れ來る基督教の長流は其淵源何れにあるかを探見せんと欲す而して多言を須るすして歐米より流れ來れること分明なれば吾人は先づ歐米の歴史に徴して其源泉を搜索すべし、

諸歐米に於て基督教の名が國史の上に載りしは羅馬帝コンスタンチンが基督教を以て國教と定めたる事跡に始まるとなれば吾人は直

ちに千五百有余年の古に遡り基督教の起原を羅馬の古史に尋ねると
 くなりぬ然れども其古史は基督教の誕生を吾人に告すして唯基督教
 の大羅馬を征服せし事跡を物語るのみなれば余輩は更に遠く遡て其
 泉源を探らざるを得ず今試に吾人はコンスタンチン帝より更に百年
 を遡りて之を考ふるに歐羅巴亞細亞亞弗利加にもに數多の教堂を有
 し隆んなる神學校大なる神學者を有せしこと明かなり即ちアレキサ
 ンドリアの神學校に於てはクレメント、オリヂン等の如き碩學を接
 して起り隆んに基督教と希臘の文物の關係を證論するを見る又西方
 亞弗利加のテリチアンガウルのアイリニヤスの如き皆當時の傑々
 たる基督教師にして基督教の神より出たることを論辨せり彼等が
 新約聖書を閱讀したること其著書中に四福音書を引用して其著者の
 誰たることを擧げたるに由り明かなり而して彼等は新約書中五六を

除くの外之を正統の聖書として尊敬せしなり吾人が今日新約聖書の
 眞偽を論ずるは主として彼等の證言に基づけるものなり彼等の手に
 著されたる基督教神學に關する文書其數擧げて數ふべからず是れ實
 に今より殆んど千七百年以前の事なり此に於て更に二百年を遡り
 今より千九百年以前オーガスタスの時世を窺ひるに當時は文學興隆
 の世にてシセロ、ブルデル、ホーラス、リグビーの如き文學者之ありと雖
 も吾人は其著書中一も基督教について論せし所あるを見ず仍て試み
 に百五十年を下り今より千七百五十年前を回顧すれば羅馬の版圖中
 ガウルにもイタリーにも希臘、カルタージュ、アレキサンドリア、アンテオ
 ケ皆基督教徒の足跡至らざる所なし是を以て吾人は明知せり基督教
 が今を距ること千七百五十年乃至千九百年までの間即ち其百五十年
 間に於て世に生出せしことを、

然れども紀元百五十年に於けるデアスチン、マルテル、百三十年に於けるバビラス等が基督教と猶太教或は基督教と異邦人の關係に就き辨論せる所の文字今日に残れり且つ吾人は新約聖書に就き彼等の証論せる所甚だ多きを見る又デアスチン、マルテルは八十歳乃至九十歳に達せる老人にして幼時より基督教徒たる者彼の時代に生存せることを其著書中に録せり是に依て之を觀るに紀元七八十年の頃即ち今より千八百二十年前既に基督教の世に存在せしこと疑ふべからざる事實なり更に又ポリカルフ、イグネチアス、バルナバ並に羅馬のクレメント等は第一世紀の終より第二世紀の初めに當り基督教徒の事績を記し又新約聖書の一半に就き評論せる所ありたり且つ同時代に於ける羅馬の歴史家タシタスは紀元六十六七同國の帝王ニロが大に基督教徒を迫害せし事績を叙述し尙ほ基督教の猶太より起りて羅馬に蔓延

せしことを明かに記載せり又吾人の有する新約聖書の原書なるものも其一半は第一世紀中紀元七十年前に成れること何人も承認せざるを得ざる所とす是等の事に憑り吾人は基督教の起原につき公明なる判断を下すことを得るを信す即ち其所謂基督教の起原なるものは實に今より千八百五十余年前亞細亞の一小國猶太に於て開けしことの明確なる事實たるを断定せざるを得ず蓋し新約聖書の成立も基督教會の設立も基督教徒なる名稱の起原も皆早く此時に存せり吾人は今斯の如く基督教原泉の所在に到着したれば宛然行程万里其希望の地に達せし如き感懐なき能はず然れども初め吾人を驅て此處に至らしめたる理性の欲望は更に又吾人を驅て其所謂基督教の泉流なるものは如何にして湧き出たるかを探究せしむ此を以て吾人は復た是れが探究の程に上らざるを得ず

借紀元四五十年頃既に基督信徒なるもの多く世に出たること事實な
 るに於ては彼等は如何にして基督信徒となりしや基督教なるもの如
 何にして猶太に生れしや是れ亦問はざるべからざることもなり教祖な
 くして世に成り立ちし宗教なきに非ずと雖も是等は其以前に存在せ
 る宗教の漸次進化せるものにて例へば印度のブラマニズム並に埃及
 希臘及び羅馬の古代の宗教の如し然れども基督教は大に是等と趣を
 異にし佛教マホメット教及びゾロアスター教の如く一定の時に當り
 突然世に起り來れる宗教なれば一人の教祖に依りて世に生れしこと
 明白なり若し夫れ基督教が第一世紀の半に於て基督を教祖となし
 て猶太より起り間もなく羅馬の全天下に波及せしこと又基督の教訓
 事業が其門徒等の手に成りたる新約書の殼皮に包まれて四方に傳り
 基督教の本体と成しと等の事實にして而も尙信じて得べからずとせば

人間界の歴史中吾人は如何なることをも信じて得べからざるなり

今より凡そ千八百二十年前即ち紀元七八十年頃に於て前に擧げたる
 ポリカール、フ、イグネーシウス、バルナバ等の時代に生存せし基督信徒中
 には基督の直接なる弟子にして我儕が聞きまた目に見懇切に觀わが
 手摺りし者と基督を呼び得る者多く生存せしに相違なし基督と同時
 に生れたりし者も此時八十歳許の年齢を保つに過ぎず又紀元六十年
 頃保羅の如きは彼得、約翰の如き基督の使徒等と互に往來せしこと明
 白なる事實なり彼等の時代に於ては敵も味方も基督の事績を承認せ
 ることなりき唯敵味方の區別は基督の事蹟に就き其真正なる意味を
 了解せると了解せざりしとに在るのみなり
 使徒及び保羅等は實に左の如く宣べて基督を傳へたり
 夫れヨハ子の宣しバプテスマの後ガリラヤより始りユダヤ中に有

し事は爾曹が知どころ即ち此ナザレより出たるイエスは神より聖
靈と才能を以て膏を沃がれ周遊て善事を行ひ凡て悪魔に憑たる者
を愈せり蓋神かれと僭なりしに因る

以上述ぶる所に據り之を考ふるに基督教の起原なるものは歴史的事
事實なる基督の言行に在りしこと吾人の疑ふ能はざる所なり基督は
純乎たる人間にして吾人と同様に活き又動きたる者なりしが弟子等
の作説に因り彼は神の子となれりなる或人の想像は吾人の信を置く
に足らぬ説なり如何となれば論者の謂ふが如く人なる基督が神とな
されたることありたらんには必らず紀元三十年より八十年に至る五十
年間に在りしことならん然れども其五十年間は前に云へる如く敵も
味方も基督を親睹せし證見人の時代なりし故に吾人は決して使徒等
が作説を以て其敵を欺き基督の神の子たるを信せしめしこと、想像

し得べからざればなり

今日基督教の起原を論ずるもの凡そ三種あり即ち一は日耳曼の神學
者パウルの道理論二は同國チーピンゲン大學の創立者パウルの發
育論三は其徒弟ストラウスの小説論是れなり

第一パウルの道理論は福音書なる基督の傳記を眞實なる歴史とし
て承認し其中に録されたる所の三十余の奇蹟を自然界の事實として
説明するものなり例へば基督降誕の夕博士を東方よりベツレヘムに
導きし天の星は流星或は遠方にありし路上の火光なりしならん又基
督が水上を徒歩せしとの事跡は湖邊を歩みたるを使徒等の誤認せし
ものならんなどの如く奇蹟を以て使徒等の誤認迷信に出たるものと
なすこと是なり斯の如き想像豈能く福音書中の奇蹟を説明し盡す
べけんや夫れ電光暴風雲霧及び夢等の如きものが彼の想像せし如く

恰も期するが如く約するが如く聚集會合して使徒等を欺きキリストの爲せし事を誤認せしめ福音書に録されたる如き奇蹟の信仰を彼等の心に起さしめたりとは吾人の信じ得べからざることなり斯の如きことを事實として信するよりも寧ろ奇蹟を事實として信することの容易なるを感ぜざるを得ず宜なりストラウスが一笑を以てパウルの道理論を馬倒し福音書若し眞實の歴史にてあれば吾人はキリストの生涯より決して奇蹟を除き去ること能はずと斷言せしはシユライエルマハルはパウルスに繼いで日耳曼國に起り單に道理論を以てキリスト教の起原を説明し得べからざることを痛論せり本世紀の最初に於る神學世界は道理論の氷塊を以て充填せられたる如き觀ありしかども今日は漸く宗教的感情の春陽を其中に看るに至れり而して神學の趨勢を此に至らしめたるものは主として氏の力なりとす

第二パウルは福音書を以て其時世に於ける輿論衆望を一種の小説に作りたるものなりと見做せり然れども基督教は或人の思慮幻想より生れ出でたる小説と謂ふて可ならんや基督教果して思慮の産物たらんには吾人は其組織中に多くの順序法式を見出すべき理なり然るに基督教の組織は斯の如き思想の證據を有せず甲乙二人來りて互に反對せる教理を其中より汲み取ることをすら尙ほ能くすべき情態に留まらるものなり且つ其時世に於ける輿論衆望がパウルの想像せる如く相聚て一種の小説を組成する資材となるまでも互に一致結合の性質を有せりとは是れ豈容易に信じ得べきことならんや更に又基督教が當時の輿論衆望に投合せしとは事實に背馳せる妄想なり抑々基督教は希臘の哲學者に向ふて小兒の如く謙遜なれど教へ猶太の教家に對して基督の十字架を信せよと勧めたり是れ豈彼等の輿論に合するも

のならんや又基督は救法師としては其風采國民の希望に背き豫言者として奇蹟を行ふを以て大預言者たるの資格を欠き又猶太人の埃ら望みたる救主としては大に彼等の理想に反せしなり斯の如き基督を描寫するもの豈小説家の本望あらんや是れ吾人が基督教の起原に就きパウルの所見に同意する能はざる所以なり又パウルは新約書中に論争の書講和の書等の別を立て新約書を以て彼得黨と保羅黨との間に起れる諍鬭の結果なりと推測するも吾人は彼の謂ふ如き論争の證據を新約聖書中に見出すこと能はず且つパウルは彼得を初め使徒等が基督の中に在りし世界主義を領會するの明なかりしことを以て其論争の原因となせども吾人は先づ第一に已を萬民の救主なりとして宣揚せし基督の世界主義を使徒等が毫も會得し能はざりしことを想像すべからず要するにパウルの發育論は新約聖書の成立を論ずる

ものにして新約聖書以前に在りし基督教の起原を論究するものに非ず

第三ストラウスは福音書に録されたる基督傳を以て猶太人が基督をメッシア(救主)と信仰せしに由り基督の事情に對照して舊約聖書中に散在せし所の小説を基督に附會せしものなることを想像せり例は基督が五の麩麩と二の魚を以て五千人に食を與へたる事績は舊約書中モーセがアラビアの野に於て天より降れるマナを以てイスラヘル人を飽しめたる小説を基督に附會せしものなりとなすが如し
余輩はストラウスに問はざるべからず使徒等が諸種の小説を集め來りて活ける基督の人物を描寫し後世を欺き得たる所の其智慧は何處より來りしや又彼等が已の捏造せし基督を信じて熱心に彼を宣傳せしとは吾人の信用し得ることなるや又彼等の爲せし教訓は吾人が新

約聖書中に見るが如き高尚なる徳教ならんとは是又信用し得べきことなる乎を畢竟吾人はストラウスの議論を以て基督教の起原につき満足なる説明を下せしものなりと思惟すること能はざるなり

ストラウスの謂ふが如く果して第一二世紀頃に於て何人か基督の如き人物を想像し其假想的人物に歴史上の人物事實を纏絡し一定の地理學上の關係を結び付け眞個の人間の如く活き動き語ることとなす者と爲したりしに後世の人之を以て眞個の人間と見做し崇敬するの餘此人物の爲めに死だも尙辭せざるに至れるもの之れを是れ基督教の起原なりとするも此の如き假想説焉んぞ基督教の長大なる活歴史を説明し得んや

假説其歴史上並に地理學上の關係より其人物の性行に至るまで後世の人を欺き得て何人も其假想的たるを看破し能はざるは世の人物を

捏造せし者第一二世紀頃に之れありたりとするも是れ實に尋常一様の人間にあらざる必ず不可思議の大人物たりしこと明かなりバルケル曰く基督の如き人物を捏造する者は基督より大なる者ならざるべからず斯の如く此假想説なるものは不可思議なる基督の人物を除き去らんとして却て不可思議なる他の一人物を造れるものと謂ざるべからず是豈基督教の起原を説明せしものならんや古今に於ける宗教上並に道徳上の顯著なる運動は人物ありて來れるに非ずや遠く孔子釋迦マホメットは問ふまでもなく近く宗教改革のルーテルを見るも其證據赫々たり豈獨り基督教の基督より出たることのみを非難するの理あらん

斯の如く基督教の基督なる歴史上の人物より起り來れること既に明かなれば余輩は更に進で基督の性行事業に就き探究する所なかる可

らず余は先づ基督教を信せざる第一世紀の歴史家に証言を求め以て基督教の一生を観察せんとす

前に挙げたる羅馬の歴史家タシタスは其古史第十五編四十四章に於てニロ帝の時起りし羅馬の大火を叙述せし末に録して曰く

今日クリスチアン(基督教徒)なる名の下に普通に知られたる者の教祖は基督教なる者なり彼はテベリアの治世に於てユダヤの方伯ピラ

トの時罪人として磔刑に附せられたるものなり彼の無法なる異端は一時鎮壓せられたれども再興して其惡の生地なる猶太を越へ羅馬の都市全体に波及せりと

又猶太の歴史家ジョセハスは其猶太國史第十八卷三章三節に基督教の事を叙せり曰く

人として彼を呼ぶこと正當なりとせば基督教は賢人なり多くの驚く

べき事を爲し又眞理を學ぶことを善となす者を集め是を教へたり而して多くの猶太人並に異邦人は彼に歸依せり彼は救主なり而して我黨の主だちたる人々の勸告に據りピラトは彼を十字架に釘し

たれど最初より彼に従へる者は彼を去らざりき彼は死後三日にして再び彼等に現はれたればなり神の預言者等彼に就き又彼の名に

由りて名づけられたる種族に就き許多の驚くべき事を預言しある如く其種族は今日尙ほ其跡を絶ざるなり

以上基督教に反對せる歴史家の証言に據るも基督教の教祖基督教の性

行に就き其一端を窺知し得る所ありたり是より更に歩武を進めて基督教の教科書なる新約聖書につき基督教の人物事業を探究せんとす然

れども余は新約聖書に就き豫め一言せざるべからず吾人の信する所に據れば其新約聖書なるものは基督教の死後四十年より遅くも六十年

に至る間に大成せしものにして基督及び其使徒の傳記並に其使徒より諸處の教會へ贈れる文書より成ること即ち是れなり。其基督の傳を録せるもの之を福音書と稱す即ち馬太傳馬可傳路可傳約翰傳是れなり而して約翰傳を除き他の三福音書は紀元七十年羅馬帝のタシタスがエルサレム城を陥れし前既に或る形体を具へて存在せしこと其記事の性質言語の仕組並にチヌチンマーテル等の証言に憑り斑々之を明かにするを得るなりチヌチンは第二世紀の最初紀元百三年より百六十八年の人なるに其時世に於て既に都市村落何れの處にも教會は主の日に備忘録を讀みしことを記せり而して其所謂備忘録なるものは基督の言行録にして吾人の三福音書と同様なるものなること其著書に引用する所を見て知るべし其備忘録中より彼の引用せし語中に吾人は馬太傳十七章の十三馬可傳三章十六路可傳廿三

章四六の語を發見するなり加之約翰傳三章三五の語も儘かに其中に在るが如し其他チヌチンは少くも保羅の書翰中羅馬書哥林多前書哥羅西帖撒羅尼迦後書並に希伯來書又約翰の默示録を讀りしこと明白なり。前に述べたる如く第二世紀中に於て基督教は既に廣く四方に傳播せしを以て吾人は處々に基督教の聖書なるものを發見し得るなり第一ペシトトと名づけられたるアラミヤ語(シリヤ語)とカルデア語の混合の聖經は第一世紀中に成れる最も古き經典にしてパレスタインの猶太人の有せしものなり是れ彼得後書約翰第二三書猶太書及び默示録を欠くのみにて餘は毫も吾人の有する所の新約聖書と異なることなし第二羅甸文の古聖經は北亞弗利加の經書にして雅各書彼得後書を欠くの外吾人の新約聖書と異なる所なし

第三、アイリニヤスの代表せるガウルガウルの教會教會の有する所の聖經聖經は吾人吾人の新約書新約書中より雅各書雅各書、約翰第三書約翰第三書、彼得後書彼得後書、猶太書猶太書、腓利門書腓利門書を除けるものなり

第四、モントリアンモントリアンの聖經聖經なるものは羅馬羅馬に在る教會教會の有せる經書經書にして雅各書雅各書、彼得前後書彼得前後書、約翰第三書約翰第三書、希伯來書希伯來書を欠くの外、吾人吾人の新約書新約書と異なる所異なる所を見ず

第五、シリアンシリアンの經書經書なるものは約翰第二三書約翰第二三書、彼得後書彼得後書、猶太書猶太書及び黙示録黙示録を欠く

第六、マルシアンマルシアンの聖經聖經と稱するものは路可傳路可傳及び保羅十書保羅十書にして即ち加拉太書加拉太書、哥林多前後二書哥林多前後二書、羅馬書羅馬書、帖撒羅尼迦前後二書帖撒羅尼迦前後二書、以弗所書以弗所書、ラオデキア書ラオデキア書と稱せらるる哥羅西書哥羅西書、腓利比及比腓利門書腓利比及比腓利門書なり、マルシアンはテラステラスと同時代同時代の人にて保羅保羅の書書のみを信用信用したるものなり

右に挙げし所の諸教會諸教會の聖經聖經に就き考察考察するも吾人吾人は少なくとも三福音書福音書並にマルシヤンの所謂保羅保羅の十書十書は第二世紀第二世紀の最初に於て各處各處の教會教會が神聖なる基督教基督教の經典經典として之之を尊敬尊敬せしことを承認承認せざるべからず、是等の書書は正しく基督基督に直接直接せる使徒等使徒等の著作著作として許容許容せられしことを承認承認せざるべからず、然れども余は茲茲に新約書新約書中如何なる懷疑論者懷疑論者も確實確實と認むる書冊書冊を摘擧摘擧して立論立論の基礎基礎となすべし、即ち該該の主唱者主唱者たるチーピングチーピングのパウパウルも疑疑ひ能能はざりし所の保羅保羅の四大書翰四大書翰につき、基督基督の最初の弟子弟子は如何如何に基督教基督教の本源本源たる基督基督を解釋解釋せしかを論述論述すべし、即ち保羅保羅の四大書翰四大書翰とは羅馬書羅馬書、哥林多前書哥林多前書、全後書全後書及び加拉太書加拉太書是れなり、使徒保羅使徒保羅は其初め其初め基督教徒基督教徒に取て尤も殘虐殘虐なる迫害者迫害者なりしかと一朝悔改一朝悔改めて基督基督の使徒使徒となりし以來以來二十餘年間二十餘年間基督基督の爲め爲めに忠勤忠勤せし者者なり、彼の悔改悔改の事蹟事蹟は基

督スの死シ後ノ凡ソレ七ニ年ヲ即チ紀元ニ四十年頃に起リたるものにて基督教ノ尤モ大切ナル證據なりと雖モ余ハ基督教ノ感化の條下に於テ之ヲ論ズべければ茲ニ之ヲ略シ正シく彼ノ手ニ著サれたる上記ノ四大書翰ニつき基督教ノ最初ノ使徒は如何ニ彼ヲ信仰せしかを論ズべし余今其四大書翰中より保羅ノ言二三ヲ抄出せん

イエスキリストノ僕パウロ召レて使徒となり神ノ福音ノ爲メに選バる、この福音ハ従前より其豫言者たちニ托リて聖書ニ誓ヒ給ヘるものにて其子われらノ主イエス、キリストヲ指シて示セり彼ハ肉体に由リばダビデノ裔ヨリ生レ、聖善ノ靈性に由リて誕リしことによりて明ニ神ノ子トなること顯レたり、われら彼ヨリ恩惠と使徒の職ヲ受ク、これ其名の爲メに万國ノ人々ヲして信トじ、従ハせんとなり（羅馬書一章一より五まで）

われイエスキリストト彼ノ十字架ニ釘ヲられし事ノ外ハ爾曹ノ中に在リて何ヲも知ラずと意ヲ定めたり（哥林多前書二章二）

爾曹ハ神ニ由テキリスト、イエスニ在リイエスは神ニ立ラれて爾曹ノ智恵又義また聖マた贖トとなり給ヘり（全一〇三）

われら自己ノ事ヲ宣スるに非ズ唯キリスト、イエスノ主トなること又われらイエスニ由テ爾曹ノ僕トなることを宣スるなり（哥林多後書四章五）

爾曹ハ皆キリスト、イエスヲ信スるによりて神ノ子トなれり（加拉太書三章廿六）

兄弟ヨ願クは我儕の主イエス、キリストノ恩なんぢらノ靈と偕ならんことをアーメン（全上六章十八）

以上舉ぐる所ノ保羅ノ言ニより吾人ハ基督教ニ對スる保羅ノ智識又感情ノ如何ニありしか其一端ヲ知ルに足ルを信ス保羅及び基督教ノ最初

の使徒等は實に基督を神の子と信じ神の如く彼を崇拜せしこと是れ
蔽ふべからざる事實なりき又彼基督の十字架に拯救の意味ありしこ
と並に其復活を確信せしことは更に次に掲ぐる所の彼の言によりて
明かなり

兄弟よ、われ前になんぢらに傳へし福音を今又爾曹につぐ、こは爾曹
が受けしところ之によりて立ちし所なり我なんぢらに傳へしは我
受けし所の事にて其第一は即ち聖書に應ひてキリスト我儕の罪の
爲に死また聖書に應ひて葬られ第三日に甦りケバに現はれ後十二
の弟子に現はれ給へること也、如此あらわれ給へるのち、五百の兄弟
の共に在るとき亦これに現はれ給へり其兄弟のうち多くは今なほ
世に在り此後ヤコブに現はれ又すべての使徒に現はれ最後に、月た
らぬ者の如き我にも現はれ給へり、この故に我も彼等も此の如く宣

傳へ爾曹も亦かくの如く信せり (哥林多前書十五章一より十まで)
斯の如く基督の十字架及び其復活は彼を初め使徒等の爲めに信仰の
基礎傳道の根據たりしこと眞に疑ふべからざるの事實にして極端な
る懷疑論者パウロ、ストラウスも使徒等が確實に基督の復活を信せし
事を疑ふ能はざりき

以上述ぶる所により最初の使徒等が如何に基督を了解せしかの一端
を窺知せり今吾人は保羅の四大書につき使徒等の信條を數へ彼等の
信仰の定形を構造すと假想せよ、余は信ず其定形として出で來れるも
のは恐らくは余輩が使徒信經として知る所のものと大差なかるべき
を、使徒信經なるものは第五六世紀の頃より今日に傳はれるものにし
て實に左の如し

われは天地の造主能はざる所なき父なる神を信ず、われは其獨子わ

これらの主イエス、キリストを信ず。彼は聖靈によりてはらみし處、女マリヤより生れ、ポンテオ、ピラトの時苦を受け、十字架につけられ、死して葬られ、三日目に死人の中より甦り、天に昇り、能はざる所なき父なる神の右に坐し、彼所より生る人と死せし人とを裁判せんが爲めに來り、玉はんを信す。われは聖靈を信す。われは聖公會、聖徒の交罪の赦、身体の甦りなき生命とを信す。アーメン。

彼等基督の最初の使徒なりしもの實に斯の如き條目を信仰の骨子となし、基督の仁愛を、其筋肉となし、以て宣教の大動作を起せり。而して彼等の堅固なる信仰、洪大なる愛心、勇敢なる希望は實に二千年後の今日尙ほ全世界の人心を震動するの勢力あるなり。

夫れ彼等は如何にして是等の奇妙なる信條を作りしや、彼等の愛心は何處より來りしや、彼等の希望は如何にして生れしや、抑亦彼等の宣教

に熱心なるは何に由るか

彼等は皆是を耶穌基督に依て得たりと明言せり。余は重ねて保羅の言を引て之を證明するの必要なを知るなり。

耶穌基督は即ち基督教の根源にして、其教訓、其事業は基督教の本体なること。此に至て明瞭なり。而して吾人若し新約聖書の他の部分殊に四福音を以て保羅の四大書と對照せば、基督教の根源につき吾人は更に明確なる智識を得るものなり。保羅の四書翰を承認して他の書翰を拒否するの理、安くにあるか。大に吾人の解せざる所なり。又四福音書は基督の奇蹟を載するが故に信すべからずとすか。焉んぞ知らん保羅の四大書は奇蹟中の奇蹟なる基督の甦生を以て明白なる事實となして叙述するを、詮するに余輩は新約聖書の全巻が基督教を包蔵するものたることを疑はざるなり。

前に述べたる如くパウルス、パウル及びストラウスの諸輩は新約聖書に録されたる使徒等の信仰即ち基督を神の獨子と信じ其復活を明白の事實なりと確信せし所の彼等の信仰を以て事實の基礎なき空想と妄斷鑑定し、基督を以て吾人と同等なる一個の人間なりと推判せり然しながら吾人は復活の一事に就き考ふるも是を以て使徒等の妄想迷夢と見做すこと能はざるを知るなり此一事こそ實に彼等の確乎たる信仰にてありき保羅曰く

キリストもし甦らざりしならば我儕の宣るところ徒然また爾曹の信仰も徒然からん且つわれら神の爲に妄の證をする者とならん我儕神はキリストを甦らしむと證すればなりと（哥林多前書十五章十四、十五）

是等の言に徴して按ずるも保羅並に基督に直接せる使徒等即ち彼等

の目にて懇切に基督を觀、彼等の手にて基督に捫りたる者が皆此一事を根據となして彼等の全き信仰を安さしこと明白なり、僭彼等は斯の如く基督の復活を確信せしかども其初彼等は容易に之を信せざりき且つ之を信することを欲せざりき馬可傳十六章十四節は能く是を吾人に証明するなり曰く

又其後十一の弟子の食し居る時に現れて彼等が信なきと其心の頑を責め給へり是彼等イエスの甦り給る後其を見し者の言ふ所を信せざりし故なりと

使徒等が其初頑然悟らず斷然信仰を拒否せし事柄を終に確信するに至れるとは亦奇妙にあらざるや、解釋する者あり曰く彼等は基督の復活せしことを夢しに因ると然らば則ち彼等は思はず望まざりしことを夢みしなり多數の使徒等が全時に全一の夢を見しなり又其夢が彼等

の一生を貫ける確信となりしなり是れ豈信すべき話ならんや又此幻
 夢説は基督の屍の失せし事實を説明すること能はざるなり更に又説
 を作す者あり曰く基督は一時氣息の閉塞せしことありしのみにて弟
 子の考へし如く眞の死を書めしに非ずと此の説に従ふ時は基督は只
 十字架上に於て氣絶せしのみなり然るに彼は死者と誤認せられ葬
 られて後三日を経て墓より出現せり是れ亦吾人の容易に承認し難
 き説なり且つ論者の主義より考へ來れば基督は早晩眞に死せし者な
 り然らば余は問はざるを得ず基督は墓より出現して以來何年使徒等
 と共にありしや又基督は如何にして死せしやと縱令論者の見るが如
 く一時彼等は基督を誤認して復活の信仰を起せしとありしとするも
 基督の屍体を再び眼前に見るの日焉んぞ能く彼等の信仰を保持し得
 べけんや觀よ基督の復活に於ける基督教會の信仰は終始一貫會て變

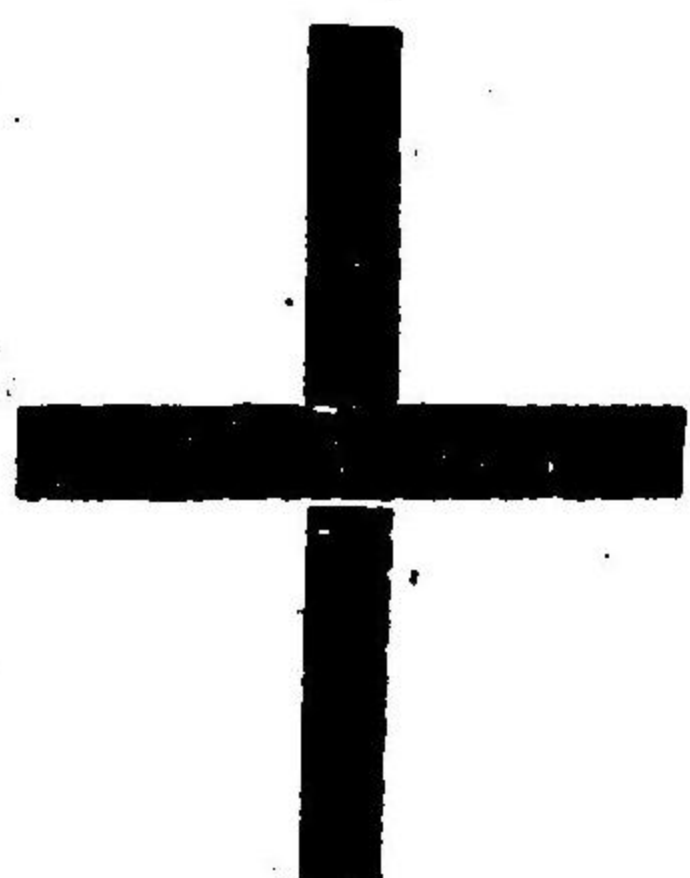
せず教會は是に由て立ち是に頼て活き是に依て今日存することを得
 るものなり吾人は基督の復活を以て公明なる歴史上の事實なりとな
 すの外到底他に使徒等の信仰を説明する道なきことを断定せざるを
 得ざるなり

基督は神乎人乎の問題に至ては余今茲に論辯するの要なきを知る只
 保羅及び基督に直接せし使徒等は皆均しく基督を神の獨子なりと信
 じ神と等しく彼を崇拜せしことを記するを以て足れりとなす如何と
 なれば縱令基督の客觀的に彼等の信せしが如き事をなさず又自ら彼
 等の信せしが如き者に非ずとなすも彼等をして斯く信せざるを得ざ
 るに至らしめたるほどの事を爲し給へること明かなり而して既に基
 督が彼等の信仰的事實の原因なることさへ明了なるを得ば基督教の
 泉流の基督より湧き出たること既に明々白々なればなり然れども使

徒等が皆均しく生命の血を濺いで確實を印せる彼等の信仰の事實は客觀的事實の基礎なき空想として説明し得るか彼等が剛膽なる大丈夫たることを得たるも道德世界の大人物たることを証したるも又忽ち羅馬の天下に勝利の旗を擧げたる彼等の勇しき傳道の成功も一として彼等の信仰に基因せざるはなし斯の如き信仰豈空想迷夢の結果なりと抹殺するを得べけんや余輩は基督教の公明正大なる活歴史を説明するに足る原因基督の中に存在することを承認せざるを得ず即ち夫の使徒等が全き心を以て信仰せし所の事實は客觀的に基督の中に現存せしことを許容せざるを得ざるなり

以上述ぶる所を概括すれば基督教の潮流なるものは其泉源を今より千八百六十餘年前猶太の地に生活せしイエスキリストなる神人に發し流れて使徒等の傳道となり新約聖書の成立となり基督教會の設立

となり其信仰の由來と成り歐米の基督教となり又我邦に基督教となるを観る夫れ莊嚴華麗なる宇宙の大觀も其根原を索ねれば炎々たる火雲の中に在りし斯の如く強壯善美なる基督教の活歴史も其本源に遡れば一人の教祖耶穌基督の性行に包まれ在りしなり愈現はれて愈奇なるもの吾人唯之を宇宙と基督教とに於て見るのみ



耶穌基督

東京英和學校々長
本多庸一

此稿は演説の筋書を補修せるものにして演説の當時には前席に於て神なる題にて説かれたるに次ぎて本題を演せるなれば神に就きて論ずるの必要なく全く有神の信仰の基礎に此稿を築きたるを諒せられよ

上には公義仁愛の徳圓滿にして智慧能力の無量なる上帝在し下には智と情と意とを具して惻隱差惡是非の心を懐ける人類の生活するあり天地は實に偶然にあらざるなりしかはわれ共森羅万象は上帝の智能を謠ふに妙なりと雖も未だ其公義と仁愛を顯彰するに足らず夫れ神の尤聖なる所は其公義にして神の尤靈なる所は其仁愛なりとす而して天地は未だ此聖と靈とを顯彰するに足らざるなり

人の性情と其行為は一種の奇蹟なり神光の一部として見做すことを得ん然れど熟人間の實狀を觀たれば宛も戰國亡命の王族が貧困耻辱の逆境に困められ心情常を失ひ憂悶遺る方なく怨恨胸に充ちて慰めなく天を怨み人を咎め物に觸れ時に感じて昔を忍ぶの涙袖を濕すの趣あり決して天民神子の風采を具ふる者にあらざるなり去れば人類天性の本願は神を見んとするに森羅万象は神徳の尤なるものを顯彰するに足らず天父なる神明の聖願はあらゆる人を子となし玉ふにあれども人は自罪惡を脱して聖を成すこと能はず如斯して終らんか天地道通せしして神人相以協はず宇宙は遂ひに遺恨を以て休まんのみ是豈に天地万物を造り玉へる上帝の聖旨ならんや故に世々の聖賢列國に生出して道を説き世を教ふること懇切なり之れ天命世を招くにあらずや世々の人間社寺を設け犧牲を獻して鬼神に仕ふ是れ本に報

じ始めに歸るを欲ふものにあらずや此天意と人望と相ひ抱合して一の結果を生せんこと蓋し必しも理外の事となすべからざるなり然りと雖も人類の罪惡は宇内普通の實事となり果たり之を處分すること抑如何ん之を滅絶せんか既に天の性に戻る之を放赦せんか宇宙の綱紀全く廢れん人類も亦改悛遷善の功を成すべからず嚴に之を責めんか失望落膽の余り憤怨愈々積て自暴自棄を以て終らん嗚呼之を近くれば不遜なり之を遠くれば怨む誰か能く此曲れる世を率ゐ綱紀を張りて天威に畏服せしめ恩惠を施して悦服せしめん人豈に惡を避けて善を行ふことを欲せざらんや悲しむべきは身既に陷阱の中にあらず自の罪に由るとは雖豈に憐むべき者にあらずとせんや既に自ら救ふこと能はず誰か平安の地を離れ自ら身を陷阱に下して此世人を救ふものぞ罪を天に得れば祈る處なしと云ふ者ならんか

或ひは又無我の眞理を觀じて、煩惱を斷じ涅槃寂滅の妙樂を求めよと云ふ者ならんか、是皆な正義の誠明智の訓なり。然れ共皆陷阱の上より下底を臨み見て言ふ所なり。暗黒寒濕餓る且凍へんと欲する者に取れて、いかんの威を與ふる者なるべきや。世には終に此暗黒の下層に天光を齎し下るものなからんか。亦終に此暗黒に呻吟するものを擁して天光の常に輝々たる高燥健全の地に昇らしむるものはなきか。

尙ほ直接に言替ふれば、人は眞正完全なる標準者、明智多涙の教師を要するなり。人は公義を廢せずして、人類の罪科を赦免し得べき祭司を要するなり。人は己の罪惡煩惱に勝ち得べき力を與ふる救主を要するなり。

更に之を實行上に應用せんとして言へば、人は曾つて恣意に見棄てたる父の家に歸り、愧なく憂なく、聖潔の心、喜樂の情を以て父と共に住

まんことを願ふものなり。誰か此の不幸なる遊蕩子の爲めに父の教を乞ひ願望成就の道を開くものぞ。

如斯嘆聲と疑問は、往古以來、天下万国に響きて絶間なかりしかば、之を慰め之を解かんと試みたるもの亦甚多しと雖、大概其目的を達せずして其聲は消へ其解は老いて全く生氣を失へり。

距今一千九百年以前、世は羅馬の鐵鞭に抗しがたくやありけん地球の大半は其輓下に服しけるが、其版圖中なる亞細亞、亞非利加、歐羅巴、三大域の中央にも見るべきパレンスチーンに一大珍事こそ出來れり。其概略を掲げん、其頃當國は既に自主獨立の國權を失ひて、舊來の王家は零落して民間に潛み居りしが、其末流にヨセフと云ふ人あり、慈悲正義をもつて立身の法となし、貧賤なれども適れ一個の君子なりけり。然るに其聘定の妻に同じ支族のマリヤと云へる處女ありしが、未だ衾を同ふせ

ざるに懷妊の徵明かなるに至れり是れ尋常懷妊の法よりは一層高尙なる神靈の働によるものとて始より奇瑞數々なりければ夫婦のものも疑念なく吉日をぞ待ちたりけり頼がて其時も満ちければ祖先メビデ王の村なるベツレヘムに於て一人の玉の男を生み落しけり是れなん世の救主となり玉へる耶穌基督におはし玉ひて其生涯こそよく其奇怪なる懷妊をば説明するものなりけれ。

扱も耶穌は其血統こそ貴けれ今は匠工を職とする貧賤の家に生れければ年の長ずるにしたがひ家父の業をば習ひ得て自も之を營みけり。斯て三十年の間は純樸閑靜なる俗間に潛伏して自然と人情と聖經を學び徐に飛鳴の準備をばなし玉ひけり歳三十を越へて洗禮ヨハネの傳道の警聲に世は春曉の眼を覺せるを機會として突然身を世間に挺出し三年が間は絶へず四方に周流して席の暖なる追もなく辛苦を嘗

めて傳道をなし玉ひしが到る處其説教は恩恵と權威あるをもて驚かれ奇抜なるを以て服せられ剩へ時の必要に迫まられては起死回生の神通力をさへ顯はし玉ひしかば一時輿望の頂顛に達し民皆な立て、王となさんとせしまでに及びけれども其品性の聖潔と企望の高遠なるとは斯る俗望を容るゝの便なかりし之に反して社會の上流は嚴正なる譴責に堪へず嫉妬と誤解を相ひ抱合して舉りて反對を試むるに至れり。

しかはあれども是皆耶穌の期したる事にてありければ聊も其鋒を避くるの方を講せず爾其聖光を放ちて他の汚穢を照らし玉ひしが無漸や三年傳道の終りに於て身を惡人の手に委ね異邦人の審判を受けて其無罪を辨することなく世に殘忍比ひ稀なる十字架上の犠牲とはなりたりかくして豫言の適應を實にし人間救罪の狀件を立て玉ひしか

ば是さへいと驚くべく嘆賞すべき珍事なるに埋葬の後第三日の曉天に天鳴り地震ひて墓の戸自ら開け鬼を欺く羅馬軍人の懼れ戰きて度を失へる間に徐かに其の墓洞を出で死者の中を立ち去り屢々其弟子に顯はれて最後の訓誨を垂れ悔ひ改めて信仰せる罪人の義とせらるゝを明證し猶聖靈を送りて智慧と力を與ふるの約を殘し看るゝ天に昇りて今父の神の右に坐し彼所より再び來りて生る人と死せし人とを裁判せん時あるべしとは眞に奇しく貴きことなりかし。

聖書に曰く道は肉體となりて我らの中に宿れり我ら其榮を見るに實に父の生たまへる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充てり。約翰傳

一章 十四節

是ぞ人類の慨嘆を慰め其疑問を解説するの鑰にして、皇天の世に賜はれる惟一の救ひなり。人は神に合せんが爲めに自ら天に昇る能はず。況

んや天をして地に降らしむるを得んや世を感むの天父は人の愈試みて彌誤り殆ど失望の極に沈まんとするを見るに忍び玉はず其道なる御子を肉體となし降りて人間に生活し人を捕へて天に連れ歸らしむるの大設計を立て之を實行し玉ひしこと此に千九百年に及べり是れ吾人が信仰の大端にして基督に就きて千言萬語を惜ざるも皆この信仰を頌たんが爲のみ。

耶穌基督に就きて調査の價ある諸點多しといへども其救主たる性格に關して尤緊要なるは神の子なるの證據に過るものあらざるべし而して其證の正確なるは千古に絶し萬世に冠たる神聖なる人物の自證に勝るものあらざるべし古人云ふ人を知るは哲と誰かよく聖人にまさりて聖人を知る者ぞキリストにまさりてキリストを知らん者は世にあるべからざるなり。

基督の如き傳記を有する人物にして自らを明知せざることは蓋し難らん斯る人物は其自言のごとく神の子にあらず亦詐僞萬世を欺く者にもあらざることを能はざるなり而して基督の遺徳と其教會の趨勢は詐僞師の遺業として甚だ不適當なる物と云ふべし基督在世の時身は鐵窓暗壁の内に在り心は憂鬱疑惑の雲に蔽はれたる約翰の使者に答へ曰へり譬は見えぬは歩み癩者は潔まり聾者は聞き死し者は復活され貧乏者は福音を聞かせらるると是れ詐僞師の敢て言ひ得る處にはあらざるなり

今試みに耶蘇の自言自證の數者を左に掲げん

耶蘇はその弟子に祈禱の標本を授けて天にまします我らの父と謂ひ玉ひしも自らはわが父と云ひ特別の關係を示せり

路加傳二節四十九節に「我は我父の事を務むることを知らざる乎」

とあり是れ十二才の時神の宮にて云ひしなり

約翰傳五章十七節に「我父は今に至るまで働くと云ひければ猶太人は神を己が父と云ひ己を神と齊しくするが故之を殺さんとす」とあり

全十章十七わが父われを愛す全十八我父より我此命を受けたり全二九我父は萬有よりも大なり又わが父の手より之を奪ふものなし全三〇我と父と一つなり杯枚擧に違わらず

此最後の本文を發言せし時猶太人は石をとりて撃んとせり而して其の理由として「なんぢ人なるに己を神となすが故なり」と云へり

又約翰傳八章五十八節に「前世の存在を證しては我はアブラハムあらざりしときより在るものなり」と云へり又全十四章廿八節に

は、わが父は我より大なればなりと云へり天下誰か人間にして上帝と大小を比較する程の自惚者あらんや若し其實なくんば想像も及びがたき處なりとす。

耶蘇捕はれてサンヘドリン議會の審問を受けたるとき人々怪むばかりに沈黙せしが祭司の長爾はキリスト神の子なるかと問ふに至りて忽ち口を開きて曰く爾が言へるごとしと 馬太二十六

章六十四

基督をして其壽を永ふするに心あらしめば第一になすべきことは神の子たるの信仰を拋棄するにありしなり然るに基督の心は此信仰と此名の爲めに殉死することを望めるものゝごとし夫人自己の證言を確實ならしむるが爲めに血を染め生命を犠牲にするより嚴肅にして眞實なる法方はあらざるべし基督實に之を爲せり。

次に最も重量ある證言は其門徒の信仰なりとす。

主の兄弟なるヤコブは骨肉の私見僻情に遮られて初は兎角主に抵抗せしが主復活の後忠良謹嚴なる門徒となれり其書翰に曰く

「第の主なる我等の主イエスキリスト云々」ヤコブ書 一章

主在世の間は最も親愛せられ十字架に釘せられし時も猶其傍を離れざりしヨハナは曰く

「かれは眞の神また永生なり」約翰書壹、五章、廿

初めにキリスト教徒を殺戮するを以て神旨に合ふと信せしが一旦奇瑞靈驗に逢ひし後身を獻して大使徒となりし保羅は曰く

「大なる神即ち我らの救主イエスキリスト」テスト二章十三

又曰く「聖善の靈性によれば復生りしことによりて明かに神の子たること顯れたり」羅馬書壹章四

右の如き者無数なれ共今僅かに其數者を擧るのみ而して耶穌の自言猶太人の理會使徒の證言を對照して考案を下せば一點の疑を許さざるものあらんとす。

基督は其生命を堵して自ら神の子たるを證せり如是其門徒もまた生命を獻じて主の神たるを證せり。

夫れ人の爲めに己の生命を犠牲として證言するは豈偶然の事ならんや必ず堅く信じ深く覺りて止むべからざるものあるなり。

基督の神子たるは他の教理に至大の影響を及ぼすものなり人智際限ありて過去本源と未來終焉を知ることは能はず既に其始終を知らず焉ぞ能く現今に處するの道を知らん吾人は神の子を要するなり吾人は神の子の教を理會するが故に信するよりは寧ろ神の子の教なるが故に之を信じて疑はざるべきもの甚多しとす。

有限の吾人は争で無限の神性神徳を知悉すことを得ん基督にして其始より父の懷に在せる神の子なればこそ能く神の性徳を語りて吾人の思想に供し幾分か無限者の心情を飜味せしむることを得るなり人世誰か死なからん其終焉の模様は差別ありとするも死は同く死なり死にして憂愁苦痛を伴はざるとの蓋し稀なりとす然れども死は皆幾分か救世に功ありと云ふべからずキリストの死も死にあらざるなし然れどもキリストは神の子なればこそ其憂愁苦辛恥辱死亡は神の公義を顯はし天國の威權と宇宙政綱の嚴正を示し万世億兆救罪の條件として餘りあるなり

又天父の至愛なる其獨子として如斯謙遜卑賤辛酸恥辱の狀態に陥らしめ自らも割愛愁傷の難を嘗め玉ふも猶此無情不義なる世を救ひ玉わらんとし玉ふことは正に罪人の睡眠を覺し寒冽死灰のごとき靈魂

に生氣を興へ感奮興起して天の故國に歸らしむるの大勢力となるなり
 人は法律の教罪を得たるのみにて足るものにあらず人は一旦感奮興
 起したればとて十分なるものにあらず人は罪惡に勝つる力を要する
 なり、基督神の子なり故に聖靈を賜ひて人をして新に生れしむ
 基督にして神の子たれば古人には非らず主は高尚なる遺徳を竹帛に
 殘して世を教ふる者にあらず、主は常に信徒に伴ふて歡樂憂愁を共に
 し玉ふなり

基督は死を目前に迎へて我既に世に勝てりといひ玉へり、又逆境の極
 點と云ふべき十字架の上に在りてわが事終れぬと云ひ玉へり、左れば主
 は今日其大計畫の實行を繼續して高明正大なる勝利の終局に向ふて
 進行しつゝあるなり、基督は野獸林鳥にも劣れる貧困の生活を經過し

玉へり、基督は愁に充ちたる人なり、基督は世の聖賢中最甚しく誤解
 せられたり、基督は嫉妬仇怨の爲めに故なくして世に最も忌はしき
 死を遂げ玉へり、然ども基督は頭腦勝利の大將なり
 一代既に去りて一代又來る實に時間は大能者なり、アレキサンダル大
 王も秦始皇も豊臣秀吉も皆古史中の夢となりて世の實際に於いては
 毫も關係なきものとはなり、果たり、東洋に於ては徳川家康こそ英の英
 にして雄の雄なる、三百年間神君の稱を天下に専らにせり、左れば今日
 に到り此稱號は青年の耳には甚だ珍しく又いやらしき音とはなれり、
 嗚呼人世は朝露の如く榮華は夢のごときか、然るに曾て身を十字架に
 釘せる基督の國家は二千年の星霜を閱して未だ古色を帯びず日に新
 境を開拓して版圖の廣大を致すあり、日本國の如き基督教の最も思し
 き歴史ある國にすら傳道僅かに二十年にして既に數萬の信徒あり、其

名は日々、響しく其徳風は月に蒼生を靡かすの原動力とならんす勢あるは奇怪の至にあらすや基督をして神の子たらざらしむる時は奇は愈奇にして怪は將さに愈怪ならんとす

人は云ふ基督實に人の子なりと然り基督は正しく人の子なり彼自ら人の子を以て自らの代名詞となせり實に然り基督は人類一般の親族なり故に一家又は一民族の子にあらすして全人類の子なり基督は人の如く生れ人の如く生長し人の如く生活したれ共彼は神の如く語り神の如く行ひ神の如く死し神の如く復生れり盧騷は磊落不羈なる學者なり然れ共基督に對しては尤謹嚴に云らく瑣羅底は人の如く死せり然れ共基督は神のごとく死せりと至評と云ふべし

基督の生涯を叙して其總鑑を掲げ基督の品性を論じて其明徳を揚ぐ

るは斯道に於て甚だ貴ぶ所なりと雖も畢竟するに基督は果して天意と人望との間を隔離せる雲烟を排除し天地相和し神人相ひ親むの樂境を開くに足るものなるや否を明むるに外ならず而して今余輩の從事せるごとき少時間と短文章を以て斯の如き大問題に答へんと欲するに當りて直だちに論戰の本營を空くよりも他の策なしとす即ち基督が神の子たるの最重要一証を擧ぐるにあり故に今此稿を結ばんとするに當り再び繰返して言はん基督程の人物を知らんものは基督ならざるべからずと顔淵の孔門の第一坐を占むる人なり其孔子を讚するの言に曰く仰之彌高鑽之彌堅瞻之在前忽然在後是れ讚辭なりと雖も忠信篤實なる顔子が其智力の及びがたきを白狀せしものなるは明かなり顔子にして孔子を悉く知ること能はずとせば況んや顔子に及ばずして顔子よりも猶は遙かに其時代を隔て又は

然らざるも交際の疏なるものに於てをや、故に曰く孔子を知るは孔子ならざるべからず

基督の爲めに基督を証するもの基督に過ぐべからず之に次ぐものは其使徒にして即ち孔門の顔淵子貢に於けるがごとし余輩は他の諸點に論及し能はざりしと雖ども既に此の二種の証者を紹介せり。苟かに期す、讀者にして私情を去りて自己の微力なるを記憶しつゝ、天と人との關係を考へ身の運命の歸する所を求めば必ず救主の要を感ずる事あらん、既に之を感ず、基督を見るの明は大いに前日に異なるものあらん。余輩は信ず、人は基督を知りて然る後、之を要するにあらず先づ之を要す故に能く之を得るなりと、夫れ一旦豁然として通ずる處あれば幽冥二つならずして天地道通すべし、神人和睦は理論にあらずして實事となるべし、是れ基督を信奉するもの、常とする所にして學者の解説

を得て始めて詫するものにはあらざるなり。基督曰くわれは道なり眞なり生命なりと、人のよつて行くの道なり人のよつて立つの眞なり人によつて生るの生命なりとの意なり、道と眞と生命を求むるの人は須く深思熟考すべきの言なりとす



「聖靈—勢力の本源」

—中央會堂總理

シーエス、イビー

夫れ世界に行はるゝ宗教は其數許多なれども皆其由來の本源年代場所又は其包圍の事情並に教祖の性格を感得して各自特異の性質を有するものなり。

然らば基督教の特質は何なり耶と云ふに夙に知らるゝごとく基督教勢力の源泉は何の時代何の國何の人品にもあらず、即ち此の世界若くは人間には在らずして、神の靈なると是なり而してその勢力又た生命は畢竟基督教が神を默示すると併せて、一ト度は地に人跡を取りて生存し一旦死して甦り復た天に往きて父と偕に在まし給ふ所の神人を默示するより起るものにて之れを信する所の人心に天より灌ぎ來り茲に能力の源と成て働らさ玉ふ所の神の靈なり、聖書に記して—

生命を賜る者は靈なり肉は益なし我なんぢらに曰し言は靈なり生命なり―と。〔參照新約全書〕以下皆然りとす〔約翰傳六章六三節羅馬書

二章二九節一章一七、コリント后書三章六節全前書四〇二二〕

是れ基督教が多くの哲學者に能く知られず又た全く誤解せらるゝ所以なりとす。……彼等は唯だ自己の學識自己の思想にて圍繞せらるゝ一世界に呻吟するのみなれば彼等の眼に傳道は愚なるものと見ゆるなり使徒パウロ曰く―性來のまゝなる人は神の靈の情を受す是れ後には愚なる者と見ゆればなり又これを知ると能はず蓋は靈の情は靈に由て辨ふべき者なるが故なり―と。〔參照コリント前書二〇一四〕又基督教が却て自力を恃まず偏に神の慈愛より賜はる默示能力生命を受る所の謙遜なる普通人民の多數に依りて信仰せらるゝ理由も亦此特質あればこそなれ。〔マタイ傳十一〇廿五廿六、コリント前二〇

九十

眞に現今の日本國―就中イエスキリストの救に入むとを願へる國民に最急の必要は此靈の感動なり而して此活ける神の靈の欲し玉ふ所は各信徒の心裡に臨り住まむとなり吾儕若し無限の幸福を享けむとならば須らく信仰によりてこの聖靈を受くべし否らざれば則ち永遠に亡びざるべからず。〔エペソ四〇卅テサロニケ前書五〇十九〕今日は是れ聖靈の治世なり吾人若し天父の約束し給へる其の子イエスの救ひに與らむとならば則ち聖靈の働き及びその導に依らざるべからず。

舊約書は父なる神を默示しエホバの治世を證明するに止まり新約の福音書は贖ひ主を示して萬民を罪より救ひ給ふ神の愛を教へ子なるイエスキリストの治世を明にせり而して聖靈の治世なるも

のはペンテコステの日に始まり肉眼を以て見ることを得ざる神の靈は常に活き常に吾人の心に來り以てイエスキリストの拯救を吾人に願與するものなり

此聖靈の感動は將來此世の全く義とせられて全く新しく成る迄續くものなり。

救主キリスト地に在ませる時其弟子等に曰けらく、吾れ吾を遣し、父に往かひされと憂ふる勿れ吾が去るは汝等の爲め益となるなり吾れ父に求めて別に慰むる者を汝等に遣はさんと。(ヨハネ傳十六〇七)何故益なりし乎。

是れ世を救はんとなし給ふ所の神の高大なる思想の十分に現實せんが爲め益なりしなり。舊約時代の拯救は一民族に限り、キリスト時代の拯救は一小地方に限れりされと神は更に進んで博く全人間の靈魂

を救はんが爲めに凡ての物質的限界を取り除きイエスキリストの肉体さへ之を脱却し玉ひしなり。

此完全なる極拯を万国万民及び万世に施して世の終り迄に至らしむること——是れ聖靈治世の目的なり。語を換へて言へば尤も深き拯救の實驗を尤も廣き境域に開展せしむること。是れなり。斯の如き高大なる神の目的は只聖靈の願與及び其佑導に依て成就せらるゝなり。聖靈は即ち神なり。

吾人は生れながら神の事を辨へ能ふ所の方なけれども聖靈は先づ我必に降りその裏に住み以て神の奧義を我人に默示するものなり。

(コリント前書十二〇六一一)

聖靈は吾等に天父を顯はし——その驚べき愛を告げ——其最も深き秘訣を示し玉ふ也。夫れ然り人の情は其裏なる靈魂の外に知るものなし。

その如く神の情は神の靈の外に誰も知るものなし。(コリント前書

二〇十一三三、ペテロ后書一〇廿一)

殊に又た聖靈は吾儕にキリストに關はる奧義を教ふ——吾人を救はん
爲り子に由りて成し玉へる神の奧義秘訣を顯はし玉ふ也。(ヨハネ

傳十六〇十四)

聖靈に籍り神の吾人に顯はし給ふ救とは何事なるか余は次の四項に
分ちて説かむ。

第一罪の自認——吾儕をして罪あるとを悟覺せしめ果して吾を救は
んものは誰れぞと心に問ひ遂に吾人を驅てキリストに到らしむ

(ヨハネ十六〇六)

第二悔改——聖靈は吾儕の心に罪を認知せしむるのみならず大に之
を悲しみ慨かしめ遂に吾人を導て生命の中に入らしむるものなり。

第三新生命——聖靈の感化は吾儕の心を新たに生れしめ以て罪惡

に打勝つべき新生涯に入らしむ。(ヨハネ三の五以下)

聖靈は新生命の本源にて又その贈與者なり。(ヨハネ第壹書五〇四)

第四乃ち聖靈は吾儕に新き光を與へて其中を歩ましむ吾人は是
に由り心に殘れる罪の種を認め吾れ尙は邪惡なるを知りて自ら責
め遂に吾人の献身及び信仰を十全ならしむ斯の如くして始めて吾
人は全く罪を脱して義なる者と成ることを得。(ロマ書十五〇十

六)

聖靈の感化に消極並に積極の二面あり一面に於ては加拉太書五章
十九節に記載せらるゝ如き吾儕の邪惡不潔を悉く除去して吾人の
性質行爲及び習慣を高潔ならしむ又他の一面に於ては亦全章二十
二節に録されたる所の仁愛喜樂平和忍耐慈悲良善忠信溫柔及び操

節等の如き凡て潔められたる本性の保有すべき諸徳を吾人の心に下種し且つ是を培養して成全ならしむ。(加拉太書五〇十九—廿三) 斯くの如く吾心の悪根を盡く抜き去り靈の果を以て是に相代らしむ是れ聖靈の爲し玉ふ所なり。

吾人の爲にキリストの準備し賜ひし所の神の拯拯は以上述ぶる如く聖靈の感化に由りて吾人の心に現實するものなり是に由りて吾儕は神の道を悟了し得るなり若し猶太人の如く不信仰を以て聖靈の救を拒否せば聖書なるもの暗黒無味の一書冊に過ぎざるなり然れども吾人は貴き此感化を辱ふして今一層彰かに神を見るとき得且つ神に彌々接近するを得ざるなり。(コリント后書三〇十七—十八)

如斯にして吾儕はキリストの生涯を學び且つ彼に似ることを得るの

みならず亦神と人との爲に全身全霊を献げて勞働し世に神の榮を顯すことを得るなり聖靈と勢力の天國は實に此勞働の中に在て存す。吾人は教會と共に大勢して愛の筵席に全世界を招引し來れや來て生命の水を享けよと疾呼せざるを得ざるなり

堪へ得べからざる悲哀を味ふにもかゝはらず猶望み信じて恃み樂むと
 こるありて胸中平静を失はず自ら餘裕の存するあり是之を安心と謂
 ふなりパウロ曰く我儕四方より患難を受けども窮せず詮かた盡れど
 も望を失はず迫害らるれども棄られず跌倒るれども亡びずと
 精神の安静なるは我儕に最も大切なる事なり大膽なる劍法家が術に
 於ては已に超る者を驚し政事家が役所に於ては思ひ付かざる妙案を
 郊野に逍遙するの際に得るといふは何のため乎出火の警鐘に驚き周
 章陣器を携へて逃いで寶貨を烏有に歸し平軍の飛鳥に驚きて富士川
 に潰亂せしは何のため乎他なし安静は才幹を鋭からしめ不安は靈知
 を昏からしむる爲めなり

安心は如何なる處に在るか

この世界は土俵の如し人はこの上に立ちて周囲の萬物と角力するの

のなり故に萬物に勝つの方がなければ安心は出来ぬなり人は自由の
 性を有つ故に他に制せられ餘義なくせらるゝときは忽ち心の平均を
 失ひ不安に陥るものなり
 寒き日に衣を脱し寒き夕に服を重ねるはこれ氣候と角力するものな
 り或は食ひ或は飲むは角力の爲に消耗したる力を補ふなり火の爲め
 に防火の具を造り水の爲めに隄防を築く一として然らざるものなし
 要するに勞動とは萬物と萬物と角力することの異名なりと思はばよ
 し

曾にこれのみならず亦た心の敵即ち悪悪貪婪妬忌傲慢矜夸不情不慈
 等の諸悪と角力せざるべからずこの角力は最も大切にして又最も困
 難なるものなり陽明曰く山中の賊を平らぐるは易く心中の賊を平ら
 ぐるは難し聖書に曰くわれ願ふ所の善は之を行はず反て願はざる所

の悪は之を行へり若し我れ願はざる所を行ふときは之を行ふものは
 我にあらす我に居る所の罪なり是故に我善を行はんと欲ふとき惡の
 我に居るこの一つの法あるを覺ふ蓋われ内なる人に就ては神の律法
 を樂めども我が肢體に他の法ありて我が心の法と戦ひ我を擒にして
 我が肢體の中に居る罪の法に従はざるを悟れり嗚我れ困苦人なる哉
 この死の體より我を救はんものは誰ぞやこれ我儕の主イエスキリス
 トなるが故に神に感謝す我が意志の力によりて心中の賊を克服する
 は殆んど能はざる事なり然どももしこの敵に一籌を輸するところあ
 れば忽ち心の平安を害せらるゝに至る况んや百千を輸するおや孟子
 眞勇を論じて曰くこの氣たるや義と道とに配す之れなければ飢ゆる
 なりと

安心を得るの道二つ、智識と信仰とにあり

(一) 智識とは萬物の性質を知り物と物との關係を悟り萬物をして我用
 をなさしむるあり尙俗解せば萬物と角力して之を投出さん爲に四
 十八手の術を學ぶことなり雷を捕るに避雷針あり旱を避に人造降雨
 の術あり千里を一瞬に行き一日を千日に延すを得べしされど智識を
 萬能力と思ふ可らず如何はと科學の進歩あるも彼を制するの術に於
 て増すどころあれは我に敵するものと數をも亦増すにあらすや如何
 はと心意の妙機を覺り倫理の法則を知るともこれのみにて惡欲に勝
 つことを得ると思ふはあやまりなり况んや人智を盡し人力を傾くる
 も到底制し能はざる勢力の我が周圍に逼來るに於ておやこれ釋迦牟
 尼が齡十九の青年を以て得べからざる快樂をも尙貪らんと欲する熾
 盛の欲あるときに當て金殿玉樓の温飽を厭ひ雪山樹下の凍餓を甘ん
 じ六年の久き間苦行を試みし所以にはあらざる乎これマルチン、ルウ

テルが盤雪功成りて大學を出で功名富貴手に唾して取るべきの才能を懐き、嚴父親友の苦練あるにも關せず、修道院に入りて乞食の職業をも厭はざりし理由にはあらざる乎、噫、人力の盡くる所、天力を頼まざるを得ず、智識の窮する時、信仰に頼らざる可らず。

(二) 神は天地萬物を創造り給へり、人を其靈長として創造り給へり、彼は義の神にましませり、愛の父にておはすなり、人は神意に逆ひて萬物を制する方を失へり、と雖も、真理を信じ、惡欲に克ち、神を識り、神に識られ、神に居り、神居り給はば、日は晦く、月は光を失ひ、山陥り、海沸くも、神豈我を保護せざらんや、聖書に曰ふ、それ神はその生みたまへる獨子を賜ふは、世に世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信するものに亡ることなくして、永生を受けしめんが爲めなり、と渺々たる蒼海の一粟、蜉蝣を天地に寄す、我情誰に適かんや、惟義の神、愛の父を信じ、彼の聖意に順はん

のみ

前段述べ來りたるどころによれば、人は神を信すべし、されど、已をも亦信せざるべからず、神の力に頼るべし、されど、已の力も亦盡さざる可らず、こゝに於てか、人生の發達進歩成り、安心立命を得て、智徳兼備の地に達すべきなり、クロンウエル曰く、彈藥を乾して、神に祈れ、と、孝明天皇御製の歌に、皆人の心の限り盡してし、のちにぞたのめ伊勢の神風、神といふ思想に於ては、彼是異なり、たるところありといへども、神を信じて、人力を盡す、これ、眞の安心の生ずるところなるに至ては、一なり、要するに人は、智識と信仰とによりて、内外の敵に勝つにあらざれば、他に安心を得るの道なきを知るなり。

一、こゝに一ツの疑問あり

キリスト教の要は神を愛し、人を愛するにあり、否、敵をも愛すべし、とは

キリストの聖訓なりと聞けり敵を愛すると敵に勝つとは相反することにて一は興へては取るなり一は殺し一は活すなり一は拵し一は抱くなり接吻を以て主を賣るユダの行為の外にこの二つのものを并行する能はざるなりキリストの弟子ヨハネ曰く全き愛は懼を除くとされば眞の安心は敵を愛するにありて敵に勝つにあらざるに似たり然り外形に於ては勝つと愛すると固より異なりされど自由の精神を満足せしむるに於ては一なり前にも申す通り人は自由なるものなるが故に餘義なくさるゝとさば必ず心の安静を失ふなり故に之を強ふるに當てば食色といへども尙其の煩らはしさに勝へざるべしされど好んで取るときは鼎鑊も甘きこと酷の如くなるにいたる或人戰場に於て平生の勇氣あるに似ず大に卑怯の色を現はせしとき従者怪んで之を問ひしに彼答て先には我死を求む今は死我を求むるなりといへ

りどぞこれ人心の安ど不安との岐るゝどころなり。

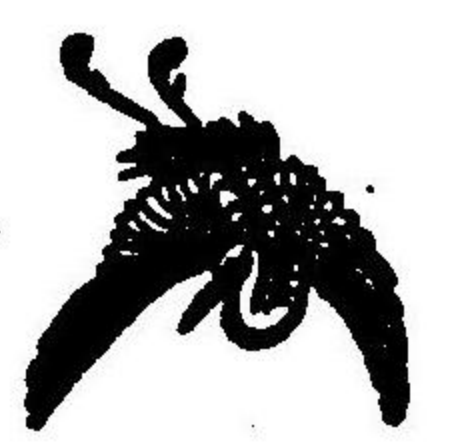
大石良雄俱不戴天の深淵を報じ將に自裁せんとするに臨み從容自若歌ふて曰く極樂の道は一と筋君と共にあみだを添て四十八人と何ぞ死を見る歸する如くなるや彼等が髑首を携來りて亡君の墓前に供するや君靈喜び受け墓石爲に震動せりと思へり彼等は現世に於ては名を青史に垂るゝを得るに足り死後亡君を追て幽界に面し復讐の狀を報ずるを樂じ況んやあみだと共に永く天堂の清福を受くるに於てねや彼の從容死を懼れざる怪むに足らざるなり大石氏斯くの如く信せしや否を知らず歌によりて想像するのみ。

愛の化身なる我儕の主キリストを見よ彼は己を知らざるものを愛し己を賤むるものを愛し己を害するものを愛し己を殺するものすら愛せり彼は罵られ嘲けられ辱められ睡かれ打たれたりと雖ども未だ嘗て

之に報ひたることなし。偶一弟子剣を抜きて敵に抗せんとするあれば
 之を誅めて剣を鞘に納めしむ。かくの如くキリストは生涯負けの形を
 現はせり。されど其愛は地を覆ひて畏るべし。精神の静謐を示せり。ゲッ
 セーチの園にて將に捕はれんとするや數十の捕吏は剣と棒とを持
 ち政府の權を藉りて襲ひ來れり。鳩の如く無害なるキリストは僅に十
 餘の弟子を従へ、手に守兵石鐵なし。然るにキリストの爾曹が尋ねると
 ころのものはいなりと曰ひて立ち給ふや捕吏等は其威嚴の當り難く
 やあうけん退却して地に仆れたり。見るべしカルバリー山上十字架を
 廻りてキリストを嘲罵したる敵は屠らるゝ。羊の如く十字架に釘せら
 れたるキリストと精神上の勝敗言はずして明かなり。キリスト曰く爾
 曹世にありては艱難を受けんされど懼るゝなかれ我既に世に勝てり
 と故に曰く眞の安心は萬物に勝つにありと。

終に一言申添ゆ可し。安心を得るは敵に勝つにありと思ひて人に勝ん
 ど思ふなかれ。勝んと思ふは既に負けたるなり。惟神を愛し人を愛し人
 の爲には己の生命さへ惜ひなかれ。されば足れり。眞の安心は愛に充た
 れたる心の中に棲めばなり。

并あるは、
 の欲するは、
 多思ふは、
 終つては、



明治廿七年二月十五日印刷
 全年全月十九日發行

編輯者 小林光茂
本郷區四片町十番地にノ四十八號

印刷者 平島曠
日本橋區上板町十六番地

印刷所 八重洲橋活版所
日本橋區上板町十六番地

發行所 東京々橋區銀坐三丁目八番地
メッセナスト出版舍

發賣所 全京橋區出雲町
警醒社書店

同 全京橋區銀坐三丁目六番地
池田榮進館



小林光茂

小林光茂君著

きりすと教一班

紙員百三十一頁
定價十錢
郵税四錢

此書は俗論罷々たる現時に最も適切なる一篇の基督教辨証論なり其目次左の如し

- 第一 基督教の起原
- 第二 基督教の特性
- 第三 基督教の感化
- 第四 基督教現今の大勢
- 第五 結論

京橋區銀座三丁目八番地

メソヂナスト出版舎

京橋區出雲町

警醒社書店

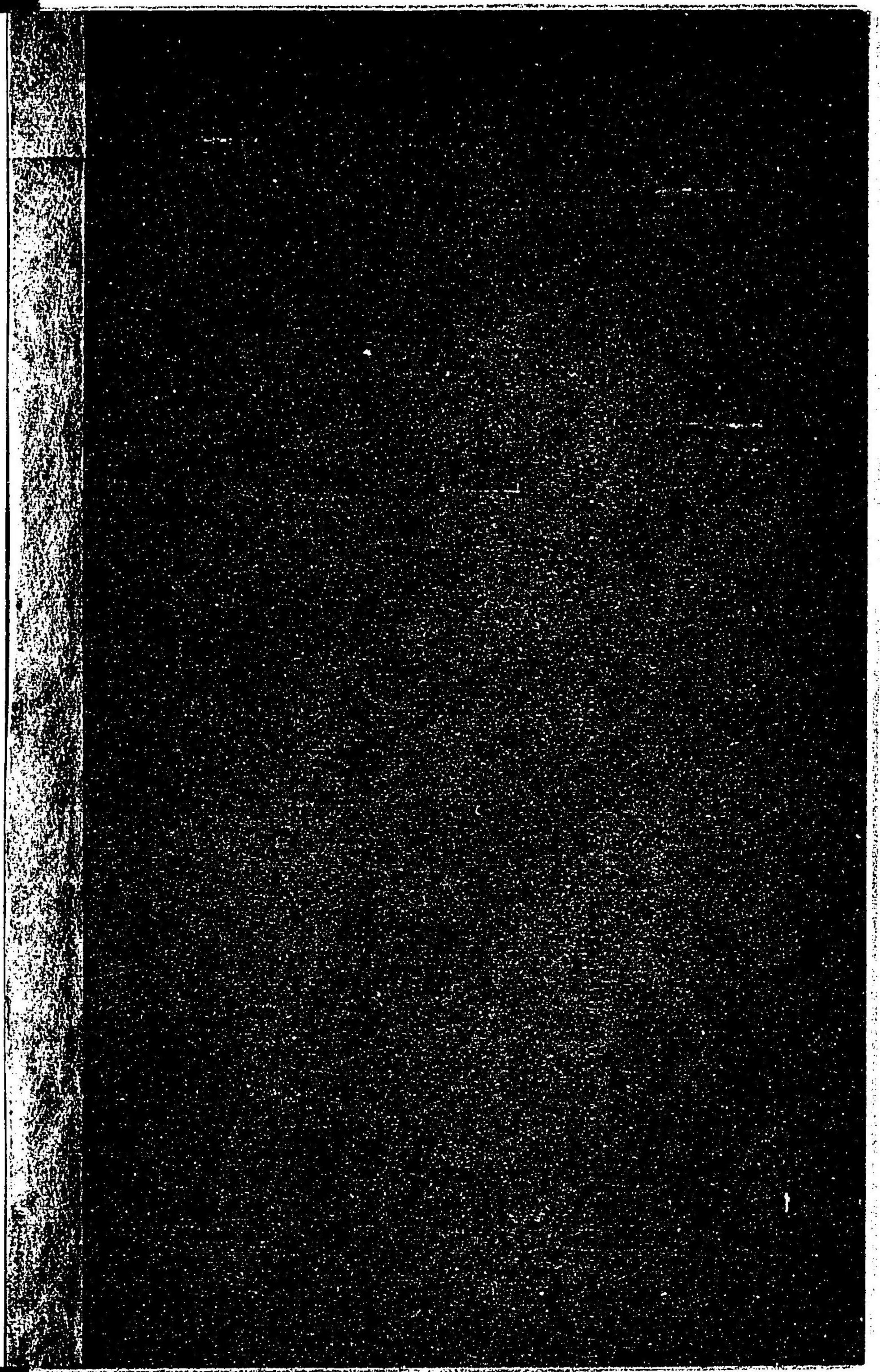
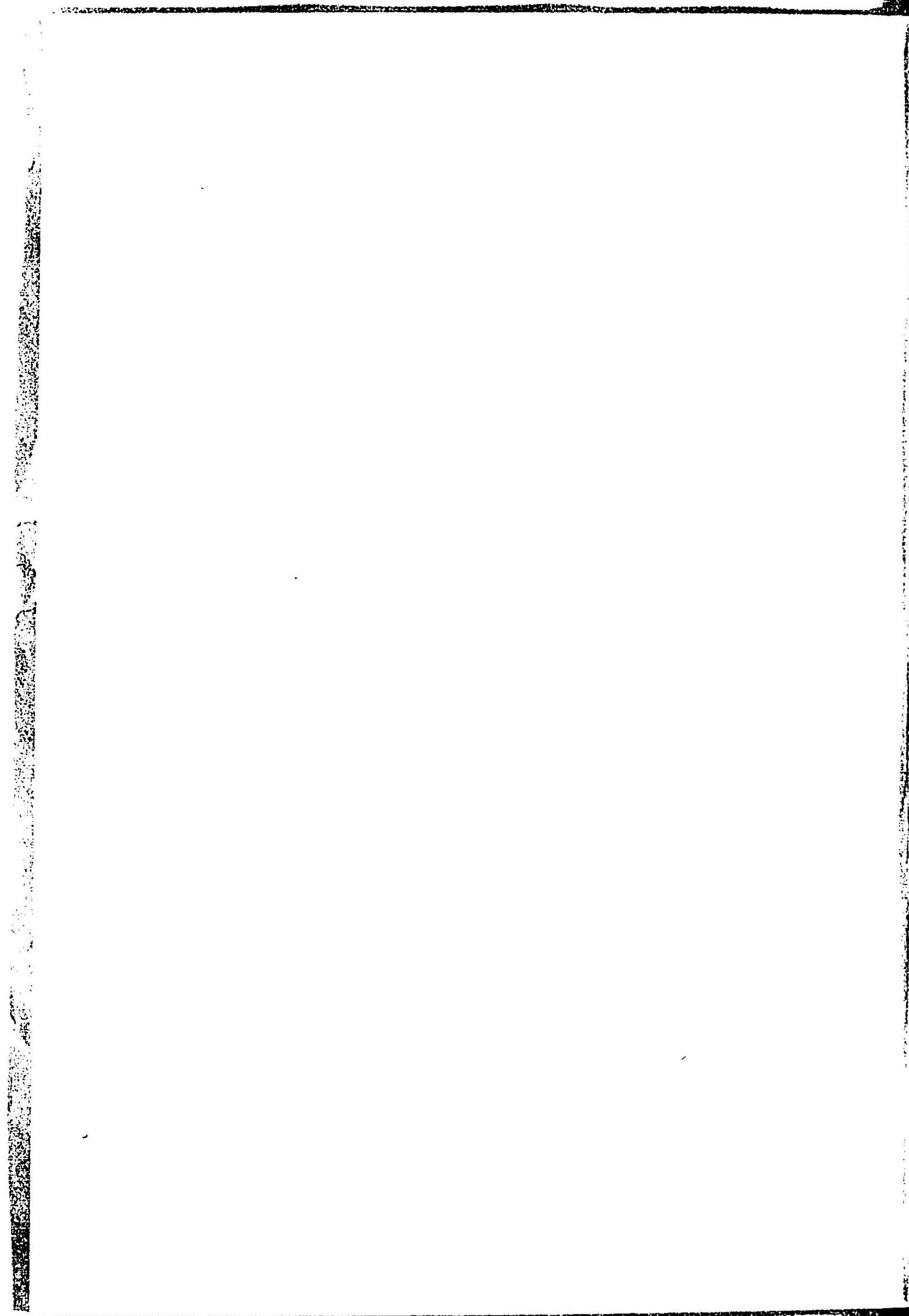
京橋區銀座二丁目

池田榮進館

發行所

發賣所

同



特 18
530

真理の叢
国立国会図書館

. 020845-000-7

特18-530

真理の叢

小林 光茂/編

M27

ABI-0674

